

富田林市埋蔵文化財調査報告書21

平成3年度

富田林市内遺跡群発掘調査概要

1992. 3

富田林市教育委員会

『平成3年度 富田林市内遺跡群発掘調査概要』正誤表

頁	行	誤	正
P.22	L. 3	ほか、瓦・金属製品	ほか、円筒埴輪・瓦・金属製品
P.46	L. 4	生駒成龍産。	生駒西龍産。

はじめに

大阪府の南東部に位置する富田林市には、富田林寺内町をはじめとする数多くの文化財が現存しています。しかし、近年増加する開発に伴い、街は少しづつ変貌し、生まれ変わりつつあります。この変化のなかで、貴重な文化遺産を守り後世に伝えてゆくことは、現代に生きる我々のつとめであります。

発掘調査というのは、残念ながら保存することができなくなる地中に埋もれた我々の祖先の生活の痕跡を、記録という形に変えて保存する目的をもつものです。

本書は、平成3年度に行われた国庫補助事業の調査成果の報告であり、記録となった寺内町の姿であります。

最後に、この調査にあたり参加・協力を賜りました方々に、厚く感謝いたします。

平成4年3月

富田林市教育委員会
教育長 西尾典次

例　　言

1. 本書は、富田林市教育委員会が平成3年度に、国庫及び府費の補助を受け実施した、緊急発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、富田林市教育委員会社会教育課、中辻　亘、松本　徹、田川友美を担当者とし、平成3年4月8日に着手し、平成4年3月31日に終了した。
3. 調査を実施するにあたり、北野耕平氏（富田林市文化財調査会委員・神戸商船大学教授）、富賀　肇（大阪府立登美ヶ丘高校教諭）及び、関西近世考古学研究会のメンバーの方々から格別の助言と援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。
4. 本書の執筆は、各々文末に記すものがあった。
5. 本書の編集は、松本と田川が中心に行った。また、製図については、田川が行った。

発掘調査参加者

〈調　査　員〉　楠木理恵

〈調査補助員〉　秋山敦子・伊藤三和・植木淳子・上田幸勝・岡本亮江・九野せゑぬ
　　頃安敏雄・中岡　勝・廣野知子・山本恭子

〈作　業　員〉　奥野久雄・小田信代・中川正博・西澤寿子・前野美智子・矢野早苗
　　山本節子・渡辺サダ子

本文目次

はじめに

例言

I	平成3年度発掘調査概要	1
II	寺内町遺跡の調査概要	3
	位置と環境	3
	調査区1 (GC91)	4
	1. 遺構	4
	2. 遺物	9
	3. 調査成果	16
	調査区2 (GC91-2)	17
	1. 遺構	17
	2. 遺物	22
	3. 調査成果	35
	調査区3 (GC91-4)	35
	1. 遺構	37
	2. 遺物	41
	3. 調査成果	46
III	まとめ	47

表 目 次

表1	発掘調査一覧表	1
表2	第1面ピット一覧表	8
表3	第2面ピット一覧表	8
表4	各遺構出土遺物一覧	9
表5	第1面ピット一覧表	18
表6	第2面ピット一覧表	22
表7	各遺構出土遺物一覧表	22
表8	第1面ピット一覧表	38
表9	第2面ピット一覧表	40
表10	各遺構出土遺物一覧表	42

挿図目次

挿図1	周辺遺跡分布図	2
挿図2	調査区位置図	3
挿図3	調査区1 (GC91) 第1面遺構平面図	5
挿図4	調査区1 (GC91) 第2面遺構平面図	6
挿図5	土壤出土遺物	10
挿図6	ピット出土遺物	11
挿図7	土壤・ピット出土石製品	13
挿図8	第1層出土石製品	14
挿図9	包含層出土遺物	15

挿図10	調査区2 (GC91-2) 第1面遺構平面図	19
挿図11	竈1 平面図・断面図	20
挿図12	調査区2 (GC91-2) 第2面遺構平面図	21
挿図13	埋甕1・2・3	23
挿図14	埋甕1埋土内出土遺物	24
挿図15	埋甕1埋土内出土遺物	27
挿図16	埋甕2埋土内出土遺物	29
挿図17	土壤1・2・ピット1出土遺物	31
挿図18	包含層出土遺物	33
挿図19	土壤1 平面図・断面図	36
挿図20	調査区3 (GC91-4) 第1面遺構平面図	37
挿図21	調査区3 (GC91-4) 第2面遺構平面図	39
挿図22	遺構出土遺物	41
挿図23	包含層出土遺物	44
挿図24	包含層出土遺物	45

付 図 目 次

揖河泉文化資料38号 「富田林寺内町の古図による復元」より転載

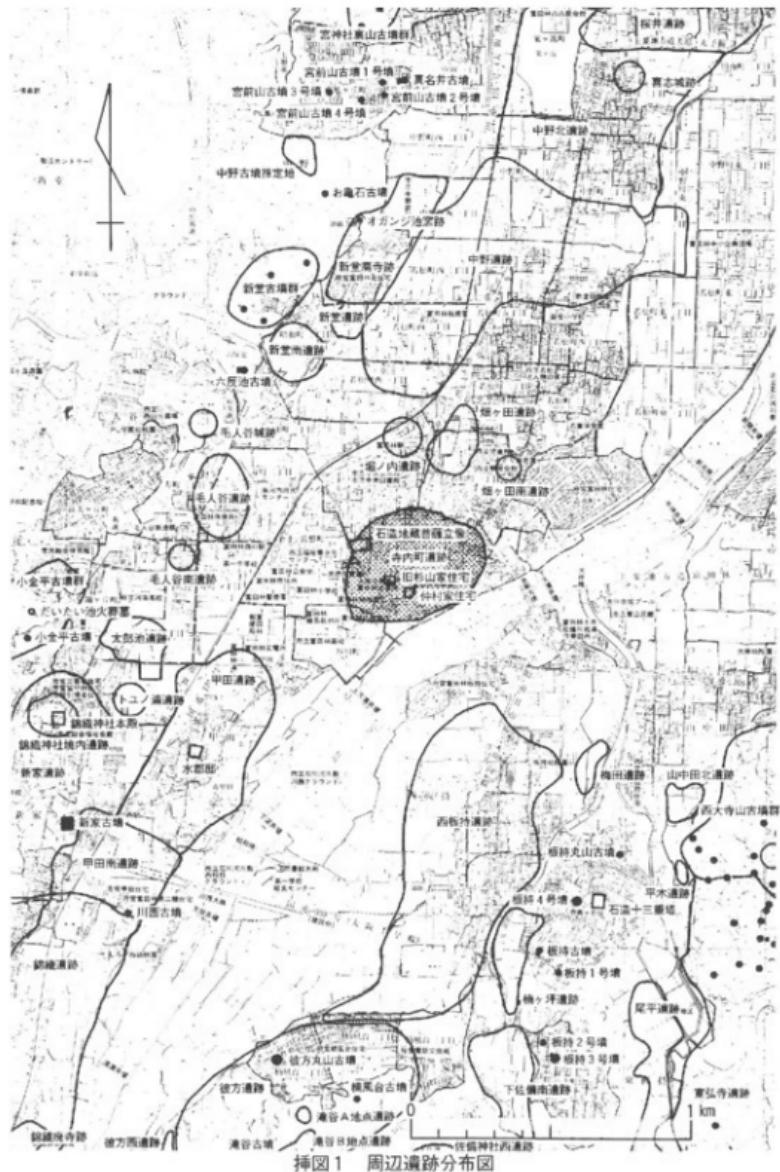
図 版 目 次

図版1	(上) GC91 第1面遺構全景 (北東から)
	(下) GC91 第1面北東部 (東から)
図版2	(上) GC91 第2面南端部全景 (東から)
	(下) GC91 第2面北西部全景 (南から)
図版3	(上) GC91 第2面ピット50遺物出土状況 (北から)
	(下) GC91 第2面北端部全景 (東から)
図版4	(上) GC91 出土遺物
	(下) GC91 出土遺物
図版5	(上) GC91-2 調査区南西部 (南から)
	(下) GC91-2 調査区南端部 (東から)
図版6	(上) GC91-2 埋甕1 (北から)
	(下) GC91-2 埋甕3 (東から)
図版7	(上) GC91-2 第1面北西部 (西から)
	(下) GC91-2 第2面北西部 (東から)
図版8	(上) GC91-2 第1面中央部 (東から)
	(下) GC91-2 竈1 (東から)
図版9	GC91-2 出土遺物
図版10	GC91-2 出土遺物
図版11	(上) GC91-4 第1面調査区全景 (東から)
	(下) GC91-4 第2面調査区全景 (西から)
図版12	(上) GC91-4 第1面ピット6 (東から)
	(下) GC91-4 第1面土壤1 (南から)
図版13	GC91-4 出土遺物

I 平成3年度発掘調査概要

No	調査期間	遺跡名	位置	申請者	規模 (m ²)	用途	備考
1	3.4.8	陶邑底跡群	大字青葉丘20	菊地 邦博	305m ²	個人住宅	1×2mのトレンチ調査。遺構なし。
2	3.4.9	中野北遺跡	中野町3丁目 883-1	小寺 康雄	85m ²	個人住宅	1×1mのトレンチ調査。地山上で遺構を確認。
3	3.5.14	別井遺跡	大字別井元南 7-2	北野 隆雄	361m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。ピットと落ち込みを検出。
4	3.5.13 ~22	寺内町遺跡	富田林町 58-13	大喜田敏員	54m ²	個人住宅	本書掲載。
5	3.5.28	中野遺跡	中野町3丁目 480-2	浅野 嶽	122m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。地山上にピットを検出。
6	3.5.23	寺内町遺跡	富田林町 173-2	北田 実二	229m ²	個人住宅	1×1.5mのトレンチ調査。石組みの暗渠を検出。
7	3.6.6 ~27	寺内町遺跡	富田林町 107-35	糸谷 和彦	76.5m ²	個人住宅	本書掲載。
8	3.6.12	新家遺跡	甲田556-2	坂山 雅美	109m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。遺構なし。
9	3.6.12	甲田南遺跡	大字甲田 59番地1	田中 敬一	200m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。地山上で遺構を検出。
10	3.6.25	新家遺跡	大字新家281-1	和田 章	234m ²	個人住宅	浄化槽部分の調査。溝構造を検出。地山上で施工指導。
11	3.7.17 ~18	錦型遺跡	大字錦織1623, 1622-6	廣野 勝光	364m ²	個人住宅	浄化槽(2×3m)調査。遺構・遺物なし。
12	3.8.2	甲田南遺跡	甲田93-17,34	高田 博志	111m ²	個人住宅	便橋部分の調査。地山上で遺構を検出。
13	3.9.9 ~10	別井遺跡	別井元南24-6	辻田 吉孝	137m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。暗灰褐色土の遺構を検出。
14	3.9.17	新家遺跡	甲田355-4	林 守	111m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。遺構・遺物なし。
15	3.10.8	鶴橋遺跡	大字錦織 640-8,-13	桜西 伸二	190m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。地山上で遺構検出。土師器、須恵器出土。
16	3.10.15	中野北遺跡	栗ヶ池町1-2	村本基治郎	297m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。ピットを検出。
17	3.10.16	寺内町遺跡	富田林町174	喜田 明	333m ²	個人住宅	1×2mのトレンチ調査。礎石、ピットを検出。
18	3.10.21	中野北遺跡	中野町2-895	酒井 初子	192m ²	個人住宅	浄化槽(1×4m)調査。遺構・遺物なし。
19	3.11.5	中野北遺跡	中野町872-1	榎本 哲一 浅尾 美幸	156m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。地山上でピットを検出。
20	3.10.16 ~11.6	寺内町遺跡	富田林町 239-2	北 福雄	67m ²	店舗付住宅	本書掲載。
21	3.11.5 ~12.5	甲田南遺跡	大字甲田42-1	小川 秀夫	195m ²	個人住宅	調査を実施。余良時代の遺構を検出。
22	3.11.13	寺内町遺跡	富田林町10-2	樋谷 太郎	292m ²	個人住宅	1×2mのトレンチ調査。近世の野戻穴?検出。
23	3.12.13	新家遺跡	大字甲田 211-5	坂口むつみ	70m ²	個人住宅	浄化槽及び1×1mのトレンチ調査。遺構なし。
24	3.12.10 ~16	寺内町遺跡	富田林町14-8	浅井 知信	79m ²	個人住宅	建物基礎部分にトレンチ。暗渠を検出。
25	4.1.21	桜井遺跡	桜井町1丁目 3096-2	細田 豊	249m ²	個人住宅	1×2mのトレンチ調査。遺構なし。
26	4.2.10 ~12	甲田南遺跡	甲田1-46, 1-47	北野恒一郎	70m ²	個人住宅	浄化槽部分を調査。地山上に暗灰褐色土の遺構。
27	4.2.19	桜井遺跡	桜井町1丁目 1829の一部	松尾 信輝	359m ²	個人住宅	便橋部分を調査。遺構なし。
28	4.2.28	喜志南遺跡	喜志町1丁目 1347-2,-5	山本 弘	406m ²	個人住宅	浄化槽(1×2m)調査。溝遺構、ピットを検出。

表1 発掘調査一覧表



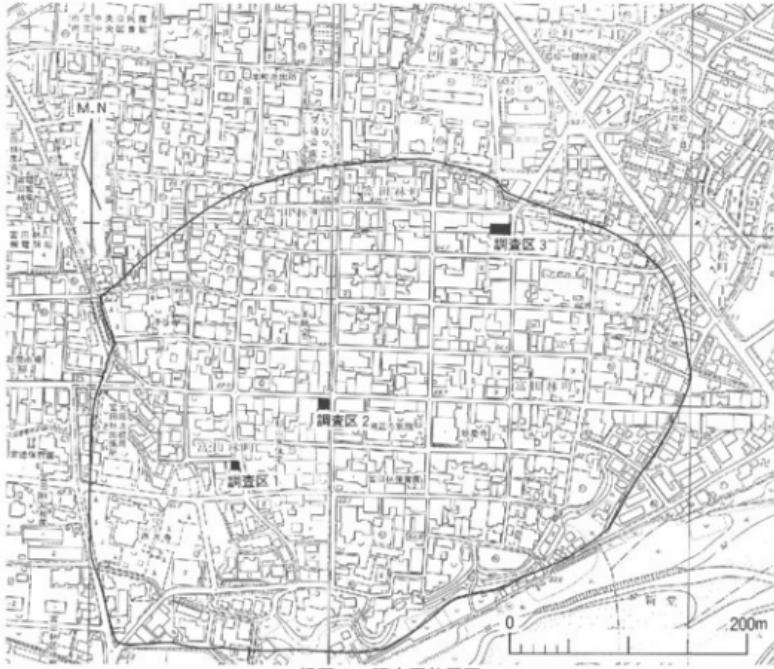
挿図1 周辺遺跡分布図

II 寺内町遺跡の調査概要

位置と環境

寺内町遺跡は、永禄元年（1558）頃、一向宗興正寺別院を中心に宗教自治都市として成立した富田林寺内町の区域である。近世において富田林寺内町は、在郷町として南河内地方の経済の中心に発展し、現在でも、江戸・明治・大正・昭和初期の町家が現存している。また、町の中は東西7本、南北6本の道路によって区画され、その町割りは建設当初から現在まで、ほぼその姿を止めており、町の周囲には土居をめぐらし、出入口には門を設置し、町の内部には下水道を完備させるといった都市計画も当初から実施されていた。

富田林市は、西を羽曳野丘陵、東を金剛・葛城山系に狭まれた谷地形をしており、寺内町遺跡は、その底を流れる石川の左岸、中位段丘の縁辺部に位置している。また、地理的にも市域のはば中心にあたり、かつて繁栄した町の面影を今に伝える南河内を代表する近世遺跡である。



挿図2 調査区位置図

調査区1 (GC91)

調査地：富田林町58-13

調査面積：54m²

調査地は、遺跡の南西部に位置し、重要文化財旧杉山家住宅の西隣りにある。寺内町内を東西に走る道路は北からそれぞれ堺里山町、富山町、北会所町、南会所町、堺町、御坊町、林町と言い、南北の通りは、東から、東筋、亀ヶ坂筋、城之門筋、富筋、市場筋、西筋となっている。この町割りで言うと市場筋と御坊町の交差する南側である。寺内町の通りは基本的に直進しているが、所々に「あてまげ」とよばれる、わざと通りをずらして見通しをさまたげている部分がある。今回の調査地は、市場筋における「あてまげ」の部分にあたっている。また、調査前の住宅は、西隣の住宅と棟つづきのいわゆる長屋建築であり、敷地としては、江戸時代末期には、旧杉山家の所有地注1であったことがわかっている。

発掘届出書は、平成3年2月26日に提出され、解体終了後の同年5月13日に事前調査として浄化槽部分にトレーナーを設定し、断面観察及び平面精査を行った結果、現況面より約20cm掘削したところで遺構を検出した。これをもとに協議を行ない、建物基礎についても調査を実施することになった。

事前調査では、トレーナー西端において赤褐色砂疊の地山を確認し、この面での遺構が本調査においても検出されると予測されたが、約20cmの表土を掘削した茶灰色土の面（第1面）で遺構が検出された。また、この面を調査したのち、確認のため工事掘削深までさらに20cm掘り下げた茶灰色土の面（第2面）でも遺構が確認された。以下への掘削は工事の影響範囲外となるためおこなわなかった。しかし、最終面と思われる赤褐色の地山は、遺構面としては確認できなかっただけ、もう1面遺構面が存在すると推測される。

以下、遺構面ごとに検出遺構について述べることとする。

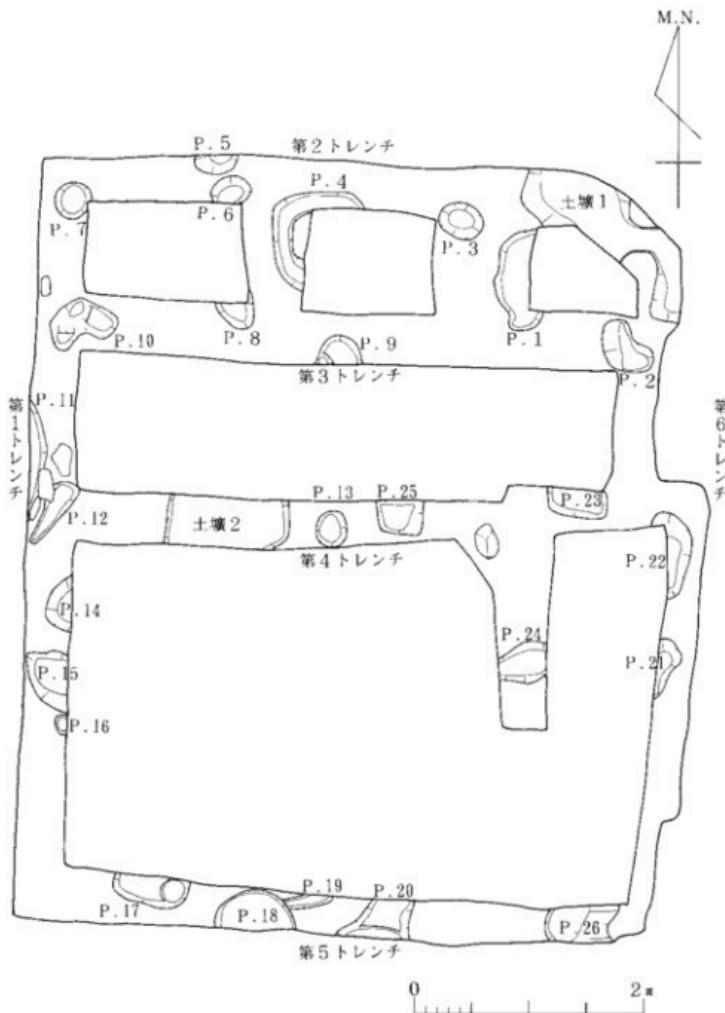
1. 遺構

第1面

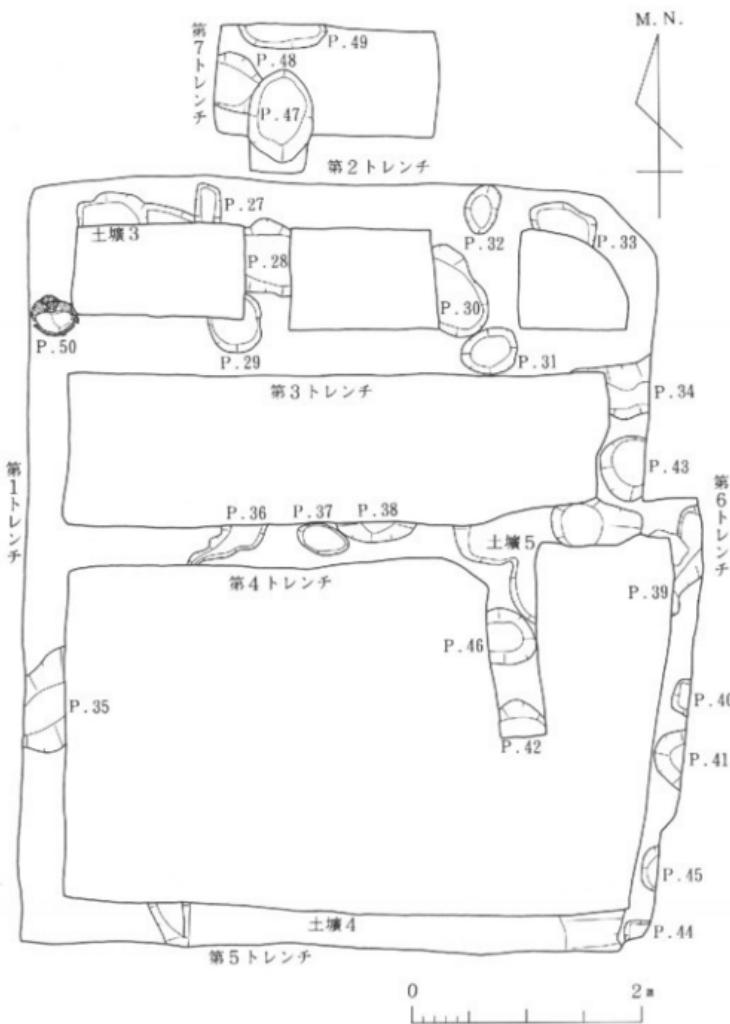
現況から約20cm掘削したところで、土壤2、ピット26、礎石が検出された。

土壤1

第2 トレーナーの東端で、東西1.6m、南北0.5m分を検出した。深さは、0.21mを測る。



挿図3 調査区1 (GC 91) 第1面遺構平面図



挿図4 調査区1 (GC91) 第2面遺構平面図

埋土は、濁灰褐色土に黄灰色土が混じっていた。非常に不規則な形で北及び東方向に延びると推定される。遺物としては、17世紀代の火薙が出土している。

土壤 2

第4トレンチにおいて、東西1.05m、南北0.44m分を検出した。深さは、0.13mを測る。灰褐色の埋土に、炭及び焼土が混入していた。

礎石

第1トレンチ及び第4トレンチにおいて検出された。第1トレンチの礎石は、いずれも平らな面を上にした状態で出土した。大きさは、直径20~30cm、同一建物の礎石であるかどうかは不明である。第4トレンチの礎石は、平らな面が東に傾いていた。直径は40cm。ただし、非常に浅い所から出土しているため、近世の建物礎石と考えられる。

ピットについては、表2を参照されたい。

第2面

第1面から約20cm掘削した地盤で、土壤3、ピット24を検出した。

土壤3

第2トレンチで東西1m、南北0.27m分を検出した。深さは、0.1mを測る。埋土は、灰褐色土であった。

土壤4

第5トレンチにおいて、東西3.92m、南北0.48m分を検出した。深さは、0.46mを測る。埋土は、濁灰褐色土であった。また、第4トレンチ第2面を掘り下げて検出した東西2.5m、深さ0.44mの遺構と埋土が同じであることから、連続している可能性もある。17~18世紀代の遺物が出土している。

土壤5

東西1.5m、南北1.0m分を検出した。深さは、0.36mを測る。埋土は、濁灰色土に炭が混入していた。不規則な形であるうえ部分的な検出であるため、性格は不明。17世紀前半の摺鉢、輸入陶磁器が出土している。

ピット番号	平面形	規 模(m)	深さ(m)	土 色・土質	遺 物
ピット1 1 (不整形)	0.89 × (0.30)	0.07	暗灰褐色土に灰および焼土塊混入		
2 不整形	0.30 × 0.54	0.04	暗灰褐色土に灰および焼土塊混入		
3 總円形	0.30 × 0.37	0.14	灰褐色土に灰および焼土塊混入		
4 (不整形)	(0.76) × (0.86)	0.09	灰褐色土に灰および焼土塊混入		
5 (不整形)	(0.16) × 0.38	0.15	灰		
6 (不整形)	(0.25) × 0.31	0.10	灰褐色土に灰および焼土塊混入		
7 円 形	0.32 × 0.32	0.07	深灰褐色土		
8 (不整形)	(0.21) × 0.34	0.08	灰褐色土に炭が混入		
9 (不整形)	(0.25) × (0.42)	0.11	灰褐色土に炭が混入		
10 不整形	0.50 × 0.43	0.13	灰褐色土に炭が混入	瓦	
11 (不整形)	(1.05) × (0.14)	0.05	灰褐色砂質土		
12 (不整形)	0.63 × (0.23)	0.07	灰褐色砂質土	上飾器、陶器、磁器	
13 總円形	0.31 × 0.25	0.04	灰褐色土に炭が混入		
14 (不整形)	(0.50) × (0.22)	0.08	深灰褐色土に炭が混入	土師質土器、瓦	
15 (不整形)	(0.50) × (0.35)	0.13	暗灰褐色土に黄灰色土が混入	土師質土器	
16 (不整形)	(0.18) × (0.11)	0.04	暗灰褐色土に黄灰色土が混入		
17 (不整形)	(0.28) × (0.65)	0.33	深灰褐色土に黄灰色土が混入	陶器	
18 (不整形)	(0.35) × (0.70)	0.12	深灰褐色土に黄灰色土が混入		
19 (不整形)	(0.12) × (0.40)	0.03	深灰褐色土		
20 (不整形)	(0.34) × (0.63)	0.25	深灰褐色土		
21 (不整形)	(0.52) × (0.20)	0.09	深灰褐色土に黄灰色土が混入		
22 (不整形)	(0.36) × (0.74)	0.21	深灰褐色土に黄灰色土が混入	瓦	
23 (不整形)	(0.25) × (0.50)	0.24	深灰褐色土	上飾質土器、瓦、砥石、鉄片	
24 (不整形)	0.37 × (0.42)	0.10	深灰褐色土に黄灰色土が混入	陶器	
25 (方 形)	0.77 × (0.20)	0.10	深灰褐色土に灰および焼土塊混入	土器質土器、瓦質土器、瓦	
26 (不整形)	(0.60) × (0.33)	0.32	暗灰褐色土に灰および焼土塊混入		

表2 第1面ピット一覧表

ピット番号	平面形	規 模(m)	深さ(m)	土 色・土質	遺 物
ピット27 1 (不整形)	(0.32) × (0.22)	0.18	灰褐色土	土師質土器	
28 (不整形)	0.63 × (0.39)	0.18	灰褐色土		
29 (不整形)	(0.53) × (0.45)	0.06	灰褐色土		
30 (不整形)	0.85 × (0.52)	0.13	灰褐色土に黄色土がブロック状に混入		
31 總円形	0.42 × 0.52	0.12	黄褐色土		
32 總円形	0.42 × 0.28	0.18	灰褐色土に濁黃色土がブロック状に混入		
33 (不整形)	(0.25) × 0.62	0.14	灰褐色土に黃色土がブロック状に混入		
34 (不整形)	0.45 × (0.72)	0.18	灰土と燒土	石	
35 (不整形)	0.84 × (0.40)	0.19	灰褐色土	土師質土器、瓦質土器、陶器	
36 (不整形)	(0.57) × 0.37	0.11	深灰青色土に灰が混入		
37 總円形	0.28 × 0.42	0.04	深灰青色土に灰が混入		
38 (不整形)	(0.18) × (0.67)	0.16	深灰青色土に灰が混入		
39 (不整形)	(0.59) × (0.22)	0.19	深灰褐色土に灰が混入		
40 (不整形)	(0.32) × (0.15)	0.06	深灰褐色土に灰が混入		
41 (不整形)	(0.52) × (0.25)	0.14	深灰褐色土に黃色土と青灰色土が混入		
42 (不整形)	(0.31) × 0.40	0.20	黃褐色土		
43 (不整形)	0.57 × (0.39)	0.18	深灰青色土に灰と燒土が塊混入	石	
44 (不整形)	(0.18) × (0.20)	0.08	深灰褐色土		
45 (不整形)	(0.38) × (0.13)	0.06	深灰褐色土		
46 (不整形)	(0.45) × (0.42)	0.15	黃褐色土に灰褐色土が混入		
47 不整形	0.80 × 0.55	0.30	黃褐色砂質土に深灰褐色土が混入	土師器・瓦質土器	
48 (不整形)	0.48 × (0.40)	0.13	暗褐灰褐色土		
49 (不整形)	(0.21) × 0.78	0.33	暗褐灰褐色土		
50 円 形	0.34 × 0.40	0.16	灰褐色土	陶器	

表3 第2面ピット一覧表

ピット

ピット50

第1トレーナーと第3トレーナーの交ったところで、口径約40cmの割れた摺鉢の中に最大長33cmの石が置かれた遺構が検出された(図版3上)。石は花崗岩で天頂部が黒くなっている、平らな面が上になった状態で出土した。摺鉢は、18世紀前半の堀摺鉢で未使用の可能性が高い。摺鉢は割れが大きく、石でたたき割られた痕跡はない。

その他のピットについては、表3を参照されたい。

(松本)

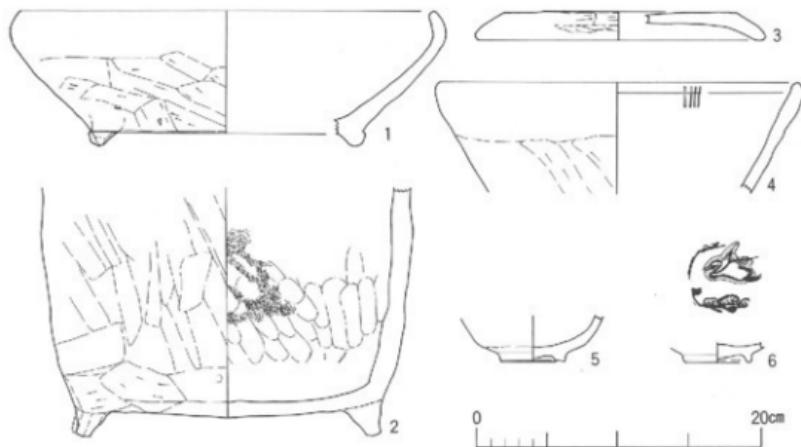
2. 遺物

この調査区から出土した遺物には、土師器・須恵器・土師質土器・須恵質土器・瓦質土器・陶器・磁器等の容器類、瓦や石臼・砥石等の石製品がある。今回の調査は、建築物の基礎部分のトレーナー調査を行ったため、出土遺物の量は、コンテナバット4箱と少ない。

各遺構からの遺物出土状況は、表4のとおりである。以下、図示した遺物について遺構毎に観察する。

遺構	弥生器	土師器	須恵器	瓦器	土師質器	須恵質器	瓦土質器	瓦	陶器	磁器	その他
土壙1				○							
土壙2		○		○				○			
土壙4				○	○	○	○	○			焼土塊
土壙5				○							輸入陶磁器・石臼
ピット10								○			
ピット12	○								○	○	
ピット14				○				○			
ピット15				○							
ピット17								○			
ピット22							○				
ピット23				○			○				砥石・鉄片
ピット24								○			
ピット25				○		○	○				
ピット27				○							
ピット34					○		○				熱を受けた石
ピット35					○		○	○			熱を受けた石
ピット43											
ピット47	○						○				
ピット50								○			摺鉢内に磁石

表4 各遺構出土遺物一覧表



挿図5 土壤出土遺物

土壤

土壤1 (挿図5-1)

土師質土器 (挿図5-1)

火舍(1)

口径29.2cm、底径19.2cm、器高9.6cmをはかる。脚は、貼り付けと思われる。体部は大きく上方に開き、口縁部で内側に大きく屈曲し、口縁端部は、丸くおさまる。口縁部内外面横ナデ、体部外面ヘラ削り、内面ナデ。体部内面には、煤が付着している。色調は、黄褐色を呈す。胎土は、やや粗い。焼成は、良。

土壤4 (挿図5-2~5)

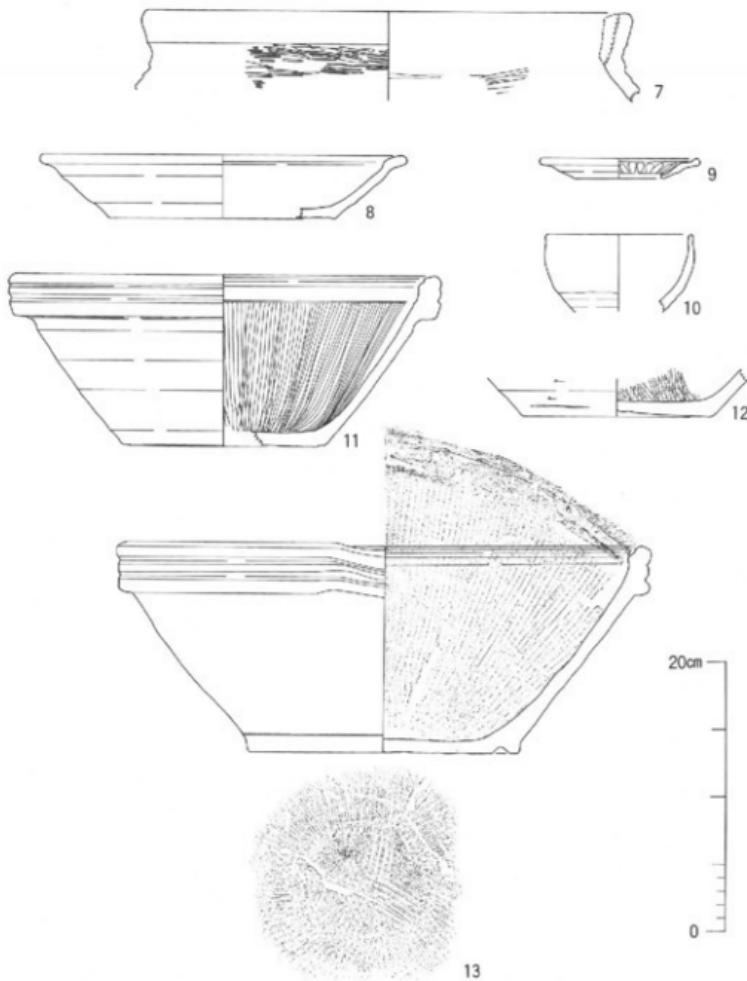
土師質土器 (挿図5-2~4)

火鉢(2)

底径21.5cm、残存器高17.7cmをはかる。脚は、貼り付け。底部は、わずかに突出する。体部は、あまり張らずに上方にのびる。外底面には、離れ砂が付着。底部外面ヘラ削り。体部外面指ナデ。体部内面ナデ下に指圧痕が残る。内底面ナデ。体部内面に炭化物がべつとりと付着している。色調は、黄褐色を呈する。胎土は、粗い。焼成は、良。

蓋(3)

口径19.9cm、残存器高2.05cmをはかる。天井部は平らで、口縁部は下外方に開き、端部は、丸くおさまる。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。天井部外面ナデ下に指頭圧痕が残る。体部・天井部内面ナデ。色調は、黄褐色を呈す。胎土は、やや粗い。焼成は良。



挿図 6 ピット出土遺物

摺鉢(4)

口径25.2cm、残存器高7.9cmをはかる。体部から口縁部に向かって直線的に開く。口縁端部は丸くおさまる。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。体部内面は剥離のためわずかに摺目が残る。色調は、黄褐色を呈す。胎土は、やや粗い。

陶器（挿図5-5）

碗(5)

高台径4.5cm、高台高0.7cm、残存器高3.25cmをはかる。唐津焼の碗である。高台は、削り出し。高台は、露胎し、他は緑色の釉がかかり、貢入がはいる。

土壌5（挿図5-6・7-15 國版4）

磁器（挿図5-6）

碗(6)

高台径4.4cm、高台高0.6cm、残存器高1.4cmをはかる。中国製染付の底部である。見込みには、呉須で鳥文が描かれている。

石製品（挿図7-15）

石臼(5)

径27cm、高さ9cm、芯棒径2.1cmをはかる。下臼である。約1/2残存。口は、8分画に3本の割溝が刻まれている。2次焼成を受けてかなりもろくなっている。一部赤変している。材質は、花崗岩である。^{注2}

ピット

ピット12（挿図6-11・12）

陶器（挿図6-11・12）

堺摺鉢（11・12）

(1) 口径30.65cm、底径14.6cm、器高12.7cmをはかる。口縁部は、端部内面下位にわずかに凸帯がめぐる。底部は、平底。口縁部回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。外底面に離れ砂が付着する。摺目は、摺鉢形成後、底部際から口縁部に向かって施されている。見込みの部分には中央を開むようにウールマーク状の摺目が施されている。色調は、赤褐色を呈する。

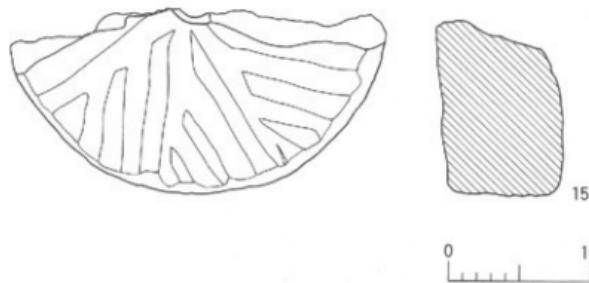
(2) 底径13.6cm、残存器高3.55cmをはかる。底部のみ残存。底部は、わずかに上げ底。体部外面回転ヘラ削り。外底面には、離れ砂が付着する。摺目は、底部際から口縁部に向かって施され、見込みの部分には中央を開むように施されている。色調は、赤褐色を呈す。

ピット17（挿図6-9）

陶器（挿図6-9）

皿(9)

口径11.2cm、底径6.5cm、残存器高1.5cmをはかる。美濃焼の菊皿である。全体に緑黄色の釉がかかり細かい貢入が入る。



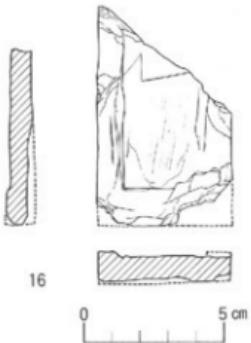
挿図7 土壌・ピット出土石製品

ピット23 (挿図6-7・挿図7-14 図版4)

土師質土器 (挿図6-7)

壺(7)

口径34.8cm、残存器高6.55cmをはかる。口頭部のみ残存。口縁部は、逆台形の帯状を呈



挿図8 第1層出土石製品

口径11.3cm、残存器高5.75cmをはかる。美濃・瀬戸系の天目茶碗である。口縁部は、わずかに外反し、端部は、丸くおさまる。

ピット35 (挿図6-8)

陶器 (挿図6-8)

皿(8)

口径26.4cm、底径16.4cm、残存器高4.7cmをはかる。備前焼の皿である。

ピット50 (挿図5-13 図版4)

陶器 (挿図6-13)

堺摺鉢(13)

口径37.6cm、底径19.4cm、器高15.65cmをはかる。ほぼ完形品。口縁部は、端部内面に凸帯がめぐる。底部は、高台風の作りを持つ。口縁部回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。高台風の部分は回転ナデ。外底面離れ砂が付着。摺目は、摺鉢形成後、底部際から口縁部に向かって施されている。見込みの部分は、中央部で摺目が交わるように3単位重ねてある。また、片口部分に正の刻印が見られる。

包含層 (挿図8-16・挿図9-17~25 図版4)

第1層 (挿図8-16・挿図9-17~19 図版4)

土師質土器 (挿図9-17・19)

火鉢(17)

口径23.4cm、残存器高11.55cmをはかる。内面に煤が付着。

摺鉢(19)

底径10.0cm、残存器高3.9cmをはかる。底部のみ残存。内面には、炭化物が付着。

する。口縁部外面横ナデ。頭部外面平行叩き(1.5本/cm)。

頭部内面刷毛目。色調は、黄褐色を呈す。胎土は、良。

焼成は、良。

石製品 (挿図7-14)

砥石(14)

最大長6cm、最大幅4.9cm、最大厚3.3cmをはかる。3

面に研磨痕が残る。対馬石である。

ピット24 (挿図6-10)

陶器 (挿図6-10)

天目茶碗(10)

口径11.3cm、残存器高5.75cmをはかる。美濃・瀬戸系

の天目茶碗である。口縁部は、わずかに外反し、端部は、丸くおさまる。

ピット35 (挿図6-8)

陶器 (挿図6-8)

皿(8)

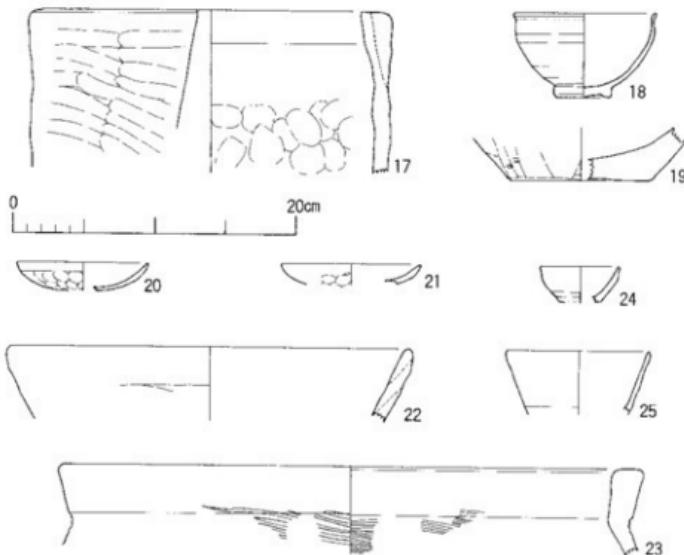
口径26.4cm、底径16.4cm、残存器高4.7cmをはかる。備前焼の皿である。

ピット50 (挿図5-13 図版4)

陶器 (挿図6-13)

堺摺鉢(13)

口径37.6cm、底径19.4cm、器高15.65cmをはかる。ほぼ完形品。口縁部は、端部内面に凸帯がめぐる。底部は、高台風の作りを持つ。口縁部回転ナデ。体部外面回転ヘラ削り。高台風の部分は回転ナデ。外底面離れ砂が付着。摺目は、摺鉢形成後、底部際から口縁部に向かって施されている。見込みの部分は、中央部で摺目が交わるように3単位重ねてある。また、片口部分に正の刻印が見られる。



挿図9　包含層出土遺物

陶器（挿図9-18）

碗18

口径10.0cm、高台径3.8cm、高台高0.7cm、器高6.0cmをはかる。

石製品（挿図8-16）

硯16

残存長7.89cm、幅4.72cm、厚さ1.14cmをはかる。海の部分が欠失している。陸の部分には、研磨痕が残る。

第3層（挿図9-20~25）

土師質土器（挿図9-20~23）

皿（20・21）

20 口径9.1cm、残存器高2.0cmをはかる。

21 口径9.7cm、残存器高1.4cmをはかる。

摺鉢22

口径28.0cm、残存器高5.2cmをはかる。体部から口縁部に向かって直線的に開く。口縁

端部は丸くおさまる。口縁部内外面横ナデ。他は、剥離のため調整不明。内面は、熱を受け変色している。色調は、褐色。胎土は、やや粗い。

壺23

口径40.55cm、残存器高6.2cmをはかる。口頭部のみ残存。口縁部は、逆台形の帶状を成す。口縁部内外面横ナデ。頭部外面平行叩き（2本/cm）。頭部内面刷毛目。色調は、黄褐色を呈す。胎土は、良。

陶器（挿図9-24・25）

天目茶碗24

口径5.5cm、残存器高2.65cmをはかる。美濃・瀬戸系の天目茶碗である。

碗25

口径10.2cm、残存器高4.6cmをはかる。生産地は、不明である。

（田川）

3. 調査成果

今回の調査はトレンチ調査であったため、各遺構の性格についてはっきりとわかったことはない。しかし、遺物については過去の調査で出土していない寺内町成立初期（16世紀末から17世紀）の遺物（土師質土器の摺鉢・火舎や美濃・瀬戸系の陶器の天目茶碗や唐津焼の碗等）がはじめて出土している。

各遺構面の時期については、出土遺物の堺摺鉢の時期から第1面は18世紀後半から19世紀、第2面は、18世紀後半が推定される。^{付3}

また、ピットの中に摺鉢が入っている例は、市教委の過去の調査でも見つかっている。しかし、今回の調査はほぼ完形品であるうえ、石が中に据えられている。これがどういう目的で埋められ、どういう意味をもつものであるかは不明である。出土状況等からみて、石が柱礎石であるから、地鎮のため摺鉢を使ったと考えられるがあくまでも想像にすぎない。今後、寺内町遺跡やその他の近世遺跡の調査が進むなかで解明されることを望みたい。

（松本・田川）

調査区2 (GC91-2)

調査地：富田林町107-35

調査面積：76.5m²

この調査地は、寺内町の中心部近くにあたる。北を堺町、南を御坊町、西を市場筋、東を富筋に囲まれた区画の北東角に位置している。富筋を隔てたすぐ東側の区画は、寺内町の中核寺院である興正寺別院が建っている。江戸時代末期の町割り復元図では、調査地をふくむ区画の東部分、約3分の1が一つの敷地であった。現況の建物は、その敷地の北部分約3分の1を使っており、西隣の家とは棟続きの住宅で、寺内町の町家の特徴である道路に直面して建てられている家であった。

発掘届出書は、平成2年10月26日に提出されており、建物解体後の平成3年6月6日に、淨化槽部分を事前調査のトレンチとして掘削し、断面観察及び平面精査を行ったところ、遺構面を3面確認した。

まず、約20cmの表土を除去したところで、礎石が検出された。断面では黄色砂質土の漆喰の床面が確認され、さらに約20cm掘削した茶褐色混疊土の地盤でも、遺構を検出した。地山は、そこから20~30cm掘削したところで確認された。赤褐色の砂疊土であった。この結果をもとに協議し、建物の基礎部分について、遺構第2面までを調査することとなった。

以下、遺構について各遺構面ごとに述べることとする。なお調査は、トレンチ調査であり、掘削土の仮置きのためすべてのトレンチを同時に掘削できなかったことをことわっておく。

1. 遺構

第1面

埋甕2、土壤1、ピット19が検出され、第1及び第5トレンチで礎石が検出された。

埋甕1

調査区の北端、第2トレンチと第5トレンチの交点で出土した。甕の口径は約45cmである。遺構の掘り方は、甕の大きさとほぼ同じと思われる。検出の際、口縁部の約2分の1が残っていた。内部に乳白色の物質が付着していたことから、便所に用いられていたと考えられる。出土状態からみて、据えつけられたままであると考えられる。また、内部に煙管、土人形、古錢、18~19世紀代の磁器が投棄されていた。

ピット番号	平面形	幅 横(m)	深さ(m)	土 色・土 質	遺 物
ピット1	(不整形)	(0.25) × (0.14)	0.13	黄橙色土	瓦質土器・陶器
2	(椭円形)	0.30 × (0.25)	0.07	黄橙色土	
3	(不整形)	(0.30) × 0.30	0.05	陶灰青色土	
4	(不整形)	(0.90) × (0.55)	0.52	陶灰青色土と焼土が混じる	
5	(小整形)	(0.20) × 0.40	0.05	黄橙色土	
6	円 形	0.30 × 0.30	0.08	黄橙色土	
7	(不整形)	0.35 × 0.10	0.05	陶灰黄白色土	
8	(不整形)	0.24 × (0.40)	0.06	燒土	瓦
9	(不整形)	0.52 × (0.24)	0.13	陶灰黄色土に焼土が混じる	小縦質土器・陶器・瓦
10	(不整形)	(0.40) × 0.58	0.11	黄橙色土	
11	(不整形)	(0.32) × 0.38	0.14	陶黄色砂質土	
12	(不整形)	0.42 × (0.40)	0.33	陶灰色土	
13	(不整形)	(0.32) × 0.75	0.13	黄橙色土	
14	(不整形)	(0.55) × (0.36)	0.14	黄橙色土	
15	不整形	0.17 × 0.20	0.08	黄橙色土	
16	不整形	0.52 × (0.40)	0.19	黄橙色土	
17	(円 形)	0.32 × (0.29)	0.06	陶灰褐色土	
18	(不整形)	0.44 × (0.36)	0.10	黄橙色土	
19	(不整形)	0.40 × (0.20)	0.05	黄橙色土	

表5 第1面ピット一覧表

埋甕2

調査区の南端、第10トレンチで出土した。南隣家との境界である。口縁部と底部が欠損しており、内部及び甕の周囲から、大量の瓦が出土している。18世紀頃の伊万里焼の碗なども内部から出土している。これも内面に乳白色の物質が付着しており、掘えつけられた状態で、家の解体に伴ない埋められたとおもわれる。

土壤1

第3トレンチと第8トレンチの交点で検出された。南北の長さは、1.9m、深さ0.3m、埋土は、黄橙色であった。

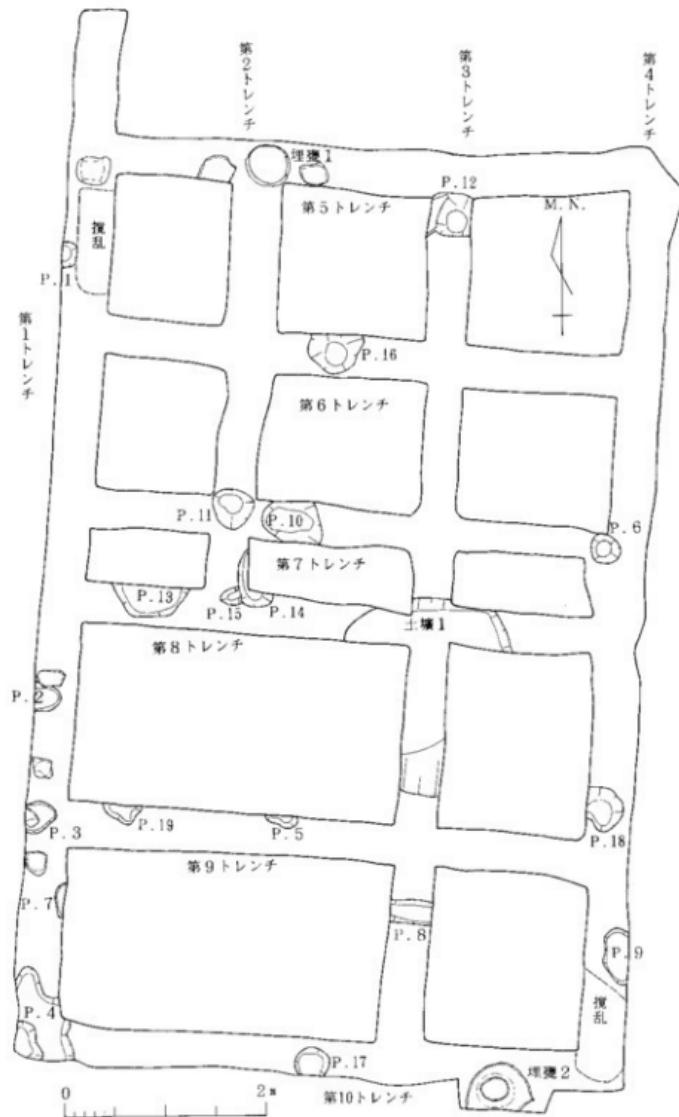
礎石

第1トレンチ及び第5トレンチで検出された。いずれも直径20~30cmで上面が平らであった。第1トレンチ南半部の4つの礎石のうちピット3内の石を除いた3つは、ほぼ同レベルで、石の間隔は1mであった。また、第5トレンチ北側に設定していた事前調査のトレンチでも礎石が検出されている。通りに面した家の庇に伴うものと考えられる。

その他

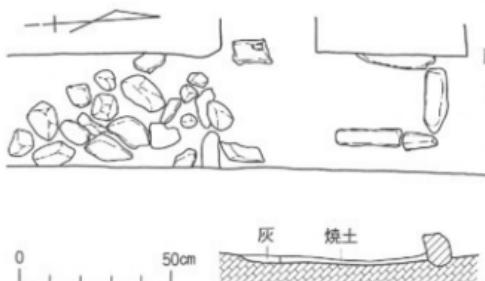
第3トレンチと第10トレンチの交点において、残っていた漆喰の床面が検出されている。(図版5下)

ピットについては、表5を参照されたい。



挿図10 調査区2 (GC91-2) 第1面遺構平面図

第2面



挿図11 罠1 平面図・断面図

第1トレントからさらに20cmを掘削し、埋壺2、土壙1、落ち込み1、窓1、ピット6を検出した。

埋壺3

第6トレントの東端で2つの壺が出土している。まず、壺(挿図13-4)がうつ伏せの状態で出土し、写真撮影後とりあげると、同一個体の口

縁部も出土した。さらにその下から壺(挿図13-5)が出土したが、口縁と体部の一部が欠損していた。2つとも内面に乳白色の物質の付着は、みられなかった。

埋壺4

第1トレント南端部で壺5が出土した。トレント内では、口縁の一部のみが出土していた。口縁部は欠損しており、詳細な時期については不明である。この壺も内部に乳白色の物質が付着していた。

土壙1

第8トレントの西部で検出された。遺物として鉄製の斧があるが、新しいものである。後世の攪乱である可能性が強い。

窓1

第4トレントの中央付近で、長さ10~20cmの偏平な石をコの字型に組み合わせて作られた窓を検出した。炊口は南に向かって開かれており、幅は約20cmであった。焼土が奥の石から約50cm、厚さ約2cmで堆積していた。焼土から南に13cmは、厚み2cmの灰が堆積していた。

ピット22、ピット25

第3トレントの南部で検出されている。ピット25は、東西0.37m、南北0.44m分を検出し、ピット22については、東西0.7m、南北0.72mで不整な円形と推測される。両方のピットに、炭の混じった焼土が埋まっていたこと、隕あっていること等から2連の窓である



挿図12 調査区2 (GC91-2) 第2面 遺構平面図

ピット番号	平面形	規 横(m)	深さ(m)	土 色	重 物
ピット20	(不整形)	(0.17) × 0.38	0.21	黄褐色土	
21	(不整形)	(0.23) × 0.45	0.20	黄色土(しきい)	
22	(不整形)	0.70 × (0.72)	—	燒土と灰	瓦
23	不整形	(0.33) × (0.20)	0.14	褐色土	
24	(不整形)	(0.62) × (0.39)	0.21	燒土と灰	
25	不整形	0.37 × (0.44)	0.10	燒土と灰	

表6 第2面ピット一覧表

と推測されるが、ピットがトレンチ外にのびているため確認はできなかった。

その他のピットについては、表6を参照されたい。

(松本)

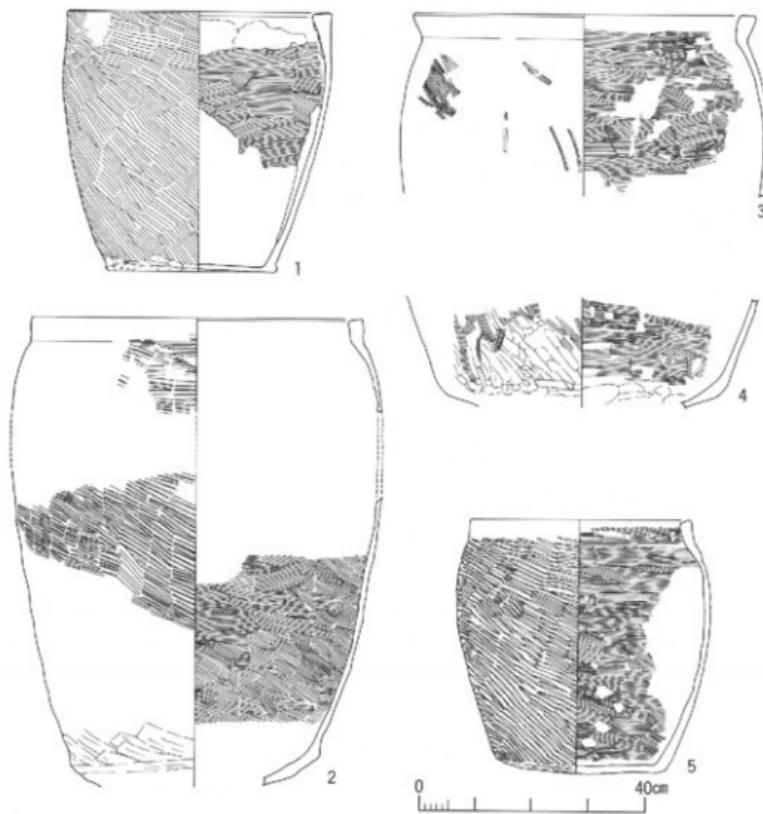
2. 遺物

この調査区からは、須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器等の容器類のほか、瓦・金属製品・土製品・古銭等が出土している。この調査も建物の基礎部分をトレンチ調査したため、遺物の出土量は少ない。遺物の大半は、埋壙1の埋土中より出土したものである。

各遺構からの遺物の出土状況は表7のとおりである。以下、図示した遺物について遺構毎に観察する。

遺 構	弥 生 器	土 師 器	須 恵 器	瓦 器	土 士	土 師 質 器	須 恵 質 器	瓦 土	土 質 器	瓦	陶 器	磁 器	そ の 他
埋 壽 1			○			○					○	○	基石・土製品・古銭・煙管
埋 壽 2						○		○	○	○			
埋 壽 3						○							
埋 壽 4						○							
土 壤 1										○	○		鉄釘
土 壤 2						○			○	○			鉄斧
ピット1							○		○				
ピット8								○					
ピット9						○		○	○				
ピット22								○					

表7 各遺構出土遺物一覧表



挿図13 埋甕1・2・3

埋甕1 (挿図13-1 図版9)

土師質土器 (挿図13-1)

亮(1)

口径46.0cm、底径28.7cm、器高46.3cmをはかる。口縁部は直口で、口縁端部は肥厚し、わずかに内傾する平坦面をもつ。体部はほとんど張らない。底部は、平底。口縁部・体部外面平行叩き（2本/cm）を施したのち丁寧にナデ消している。体部内面上半には刷毛目（5本/cm）が認められるが、下半から内底面にかけては乳白色の付着物が厚くこびりついているため調整不明。内面の付着物から糞尿溜として使用されたと推察される。色調は暗橙色。胎土は良。焼成は良好。

埋甕 1 埋土内遺物 (挿図14-6~23 挿図15-24~31 図版9・10)

土師質土器 (挿図14-7)

灯明皿(7)

口径10.7cm、器高1.85cmをはかる。わずかに丸みを持つ底部から外上方に開く口縁部、端部は丸くおさまる。口縁部内外面横ナデ。底部内面ナデ。底部外面指頭圧痕が残る。口縁端部には、煤が付着している。色調は淡褐黄色。胎土は良。焼成は良好。

施釉土師質土器 (挿図14-6)

灯明具(6)

口径6.3cm、残存器高2.1cmをはかる。台付き平皿の皿部分のみ残存。乳黄褐色の釉がかかる。

磁器 (挿図14-8~23)

皿 (8・9)

いずれも伊万里焼の染め付けである。

(8) 最大口径9.9cm、最大高台径5.05cm、高台高0.3cm、器高2.03cmをはかる。型造りにより形成されている。内面は切り紙を使って呉須でプリントされている。外面は松文が施文されている。

(9) 口径9.5cm、高台径4.8cm、高台高0.45cm、器高2.05cmをはかる。口縁部内外面に四方櫛文が、見込みに唐草文とコンニャク印判で五弁花文が呉須で施されている。高台内面に銘が認められる。

蓋 (10~13)

いずれも伊万里焼の染め付けである。天井部から口縁部に向かって直線的に開くタイプ(10・11・13)と口縁部で大きくカーブし垂直に下るタイプ(12)がある。

(10) 口径8.8cm、つまみ径3.9cm、つまみ高0.75cm、器高2.7cmをはかる。外面に格子文、内面に斜格子文が呉須で施されている。

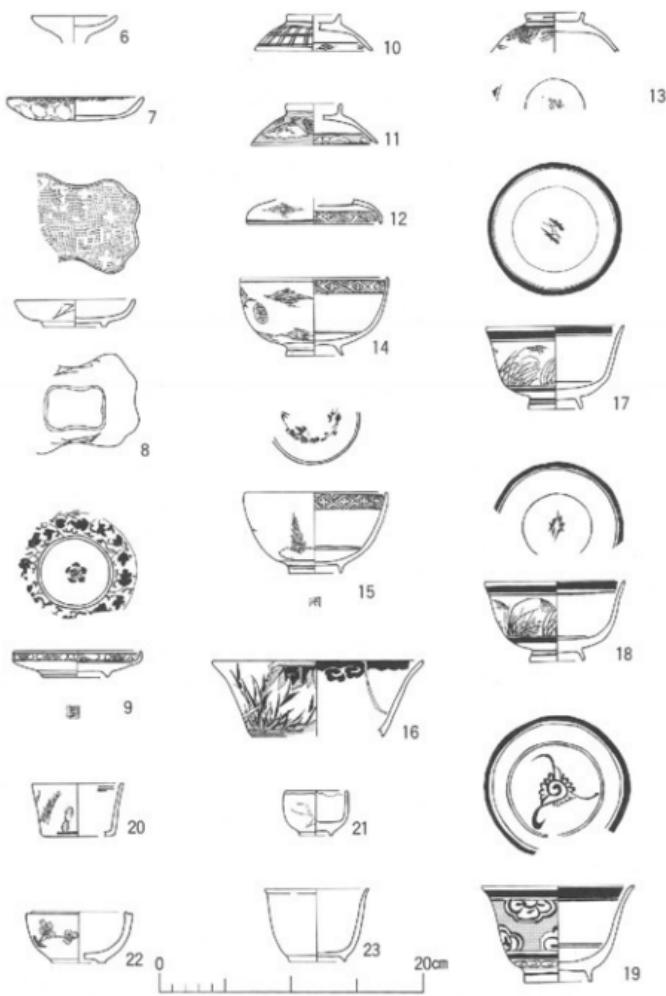
(11) 口径9.5cm、つまみ径4.1cm、つまみ高0.85cm、器高4.1cmをはかる。外面に扇文、内面に飛雲文が呉須で施されている。

(12) 口径10.1cm、残存器高1.95cmをはかる。外面に㊀字と飛雲文、内面に四方櫛文が呉須で施されている。(14)の碗と対になると思われる。

(13) つまみ径4.2cm、つまみ高0.65cm、残存器高3.0cmをはかる。外面に草文、内面に松文が呉須で施されている。(17・18)の碗と対になると思われる。

碗 (14~19・23)

いずれも伊万里焼であるが、染め付け(14~19)と白磁(23)がある。また、染め付けには、



挿図14 埋甕1 埋土内遺物

口縁部の形態から口縁端部が返るタイプ(16~19)と返らないタイプ(14~15)の2タイプある。

(14) 口径11.1cm、高台径4.3cm、高台高0.65cm、器高5.95cmをはかる。外面に㊂字と飛雲文、内面に四方櫛文、見込みに花文が具須で施されている。

(15) 口径10.65cm、高台径4.0cm、高台高0.6cm、器高6.1cmをはかる。外面に松文、内面に四方津文、見込みに松竹梅文が施されている。高台内に銘が認められる。

(16) 口径15.9cm、残存器高5.8cmをはかる。外面に草文が施されている。焼き継ぎの痕が残る。

(17) 口径10.2cm、高台径3.9cm、高台高0.98cm、器高6.3cmをはかる。外面に草文、内面に松文が呉須で施されている。

(18) 口径10.4cm、高台径3.9cm、高台高0.7cm、器高6.05cmをはかる。外面に草文、内面に松文が呉須で施されている。

(19) 口径11.3cm、高台径4.9cm、高台高0.95cm、器高7.3cmをはかる。外面に花文、内面に火焰宝珠文が呉須で施されている。焼き継ぎの痕が残る。

(20) 口径7.7cm、高台径4.1cm、高台高0.52cm、器高5.55cmをはかる。

坏 (20・21)

いずれも伊万里焼の染め付けである。

(20) 口径6.7cm、残存器高3.95cmをはかる。外面に草文が呉須で施されている。

(21) 口径4.6cm、高台径2.4cm、高台高0.35cm、器高3.4cmをはかる。呉須で施文されているが残りが悪い。口縁部の釉は拭き取られている。

合子(22)

口径7.0cm、受け部径7.9cm、高台径3.8cm、高台高0.3cm、器高4.9cmをはかる。外面に草花文が呉須で施されている。受け部と高台疊付き部分の釉が拭き取られている。

金属製品 (挿図15-24~30)

火箸(24)

長さ23.1cm、幅0.4cmをはかる。先端部分が曲がっている。

煙管 (25~30)

雁首 (25~27) と吸い口 (28~30) がある。雁首は脂返しの彎曲が小さい。

焼管 (25~30)

(25) 火皿径1.6cm、火皿高1.05cm、雁首径1.15、雁首長5.0cmをはかる。

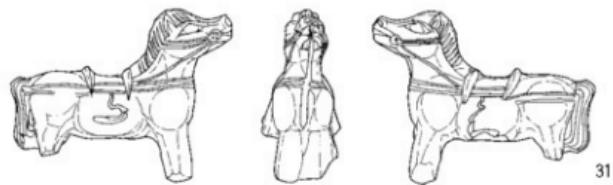
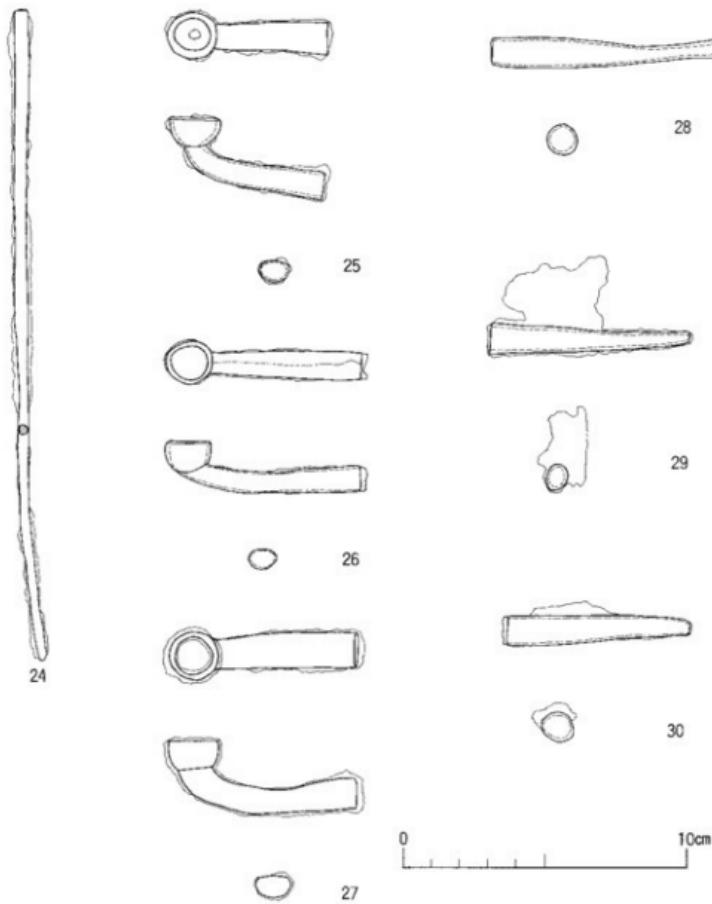
(26) 火皿径1.4cm、火皿高1.1cm、雁首径1.0cm、雁首長6.5cmをはかる。雁首上面に銅板の巻き終わりが観察される。

(27) 火皿径1.7cm、火皿高1.0cm、雁首径1.25cm、雁首長6.3cmをはかる。銷が著しい。

(28) 吸い口径1.1cm、吸い口長8.4cmをはかる。内部にラウの木質が残る。

(29) 吸い口径1.1cm、吸い口長6.9cmをはかる。

(30) 吸い口径1.1cm、吸い口長6.4cmをはかる。ラウの一部が残る。



挿図15 埋甕1 埋土内出土遺物

土製品（挿図15—31）

土人形³¹⁾

高さ6.1cm、幅7.8cm、厚さ2.7cmをはかる馬である。左右の型合わせによる型造成形。

埋甕2（挿図13—2）

土師質土器（挿図13—2）

甕⁽²⁾

口径58.7cm、底径44.25cmをはかる。口縁部は逆台形の帯状口縁、端部は内傾する面をもつ。体部は口縁部よりわずかに膨らむ。底部は、突出する。口縁部内外面横ナデ。体部外面平行叩き（2本/cm）を施しているが、表面が所々剥離している。体部内面刷毛目（4本/cm）が施されている。底部外面ヘラ削り。他は磨滅のため調整不明。色調は淡茶褐色。胎土は良。焼成は良好。

埋甕2埋土内遺物（挿図16—32～39 図版10）

磁器（挿図16—32～36）

碗（32～36）

伊万里焼の染め付け（32～35）と京焼風の伊万里焼³⁶⁾がある。

32 口径9.7cm、高台径4.05cm、高台高0.9cm、器高6.85cmをはかる。外面に一重網目文が呉須で施されている。

33 口径8.6cm、残存器高5.65cmをはかる。外面に一重網目文が呉須で施されている。

34 口径11.5cm、残存器高4.85cmをはかる。外面に一重網目文が呉須で施されている。

35 口径9.5cm、残存器高5.35cmをはかる。外面に文字文が呉須で施されている。

36 高台径4.45cm、高台高0.8cm、残存器高3.4cmをはかる。

瓦（挿図16—37～39）

軒丸瓦（37・38）

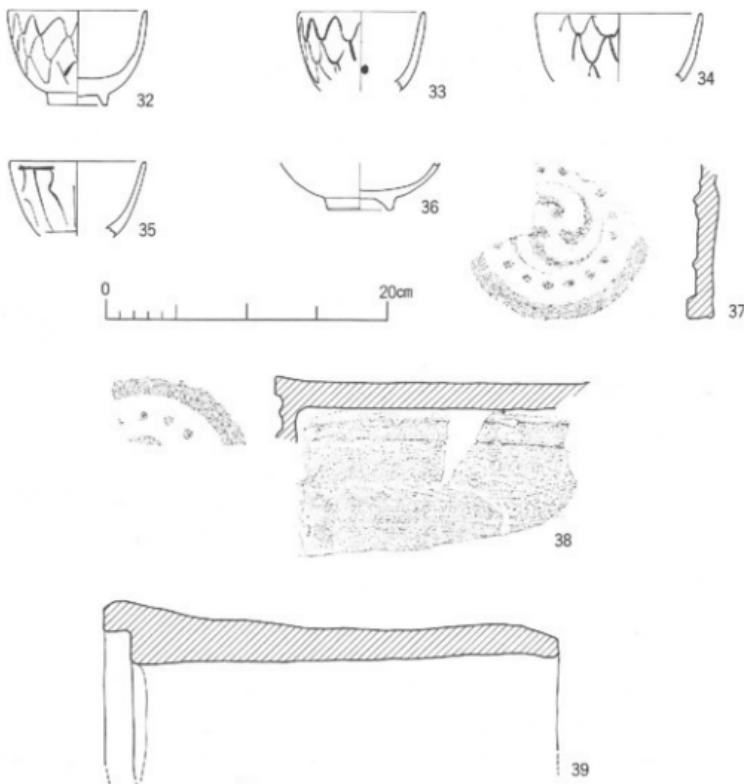
いざれも巴文軒丸瓦である。

37 内区は右巻きの三巴文である。外区には珠文が配されている。周縁は幅1.6cmの直立線である。焼成は、銀化まで至っていない。

38 内区の残りが悪いため巴文の巻きの方向は不明。外区には珠文が配されている。周縁は幅1.6cmの直立線である。焼成は、銀化まで至っていない。

棟瓦³⁹⁾

箱冠瓦の一部と思われる。焼成は、銀化まで至っていない。



挿図16 埋甕2 埋土内出土遺物

埋甕3 (挿図13-3~5 図版9)

土師質土器 (挿図13-3~5)

甕 (3~5)

(3)と(4)は同一個体と思われる。(3・4)は(5)の蓋として再利用されたものである。

(3) 口径60.2cm、残存器高32.25cmをはかる。口縁部は逆台形の帯状口縁、端部は面をもつ。体部は口縁部より膨らむ。口縁部内外面横ナデ。体部外面ナデの後刷毛目 (5本/cm)。体部内面刷毛目 (5本/cm)。色調は明黄褐色。胎土は良。焼成は良好。

(4) 底径50.8cm、残存器高29.3cmをはかる。底部は突出する。体部外面粗いナデのち刷毛目 (5本/cm)。体部内面刷毛目 (5本/cm)。底部外面ヘラ削り。底部内面押さえ。色調は明黄褐色。胎土は良。焼成は良好。

(5) 口径37.8cm、底径29.6cm、器高45.6cmをはかる。口縁部は逆台形の帯状口縁、端部は内傾する面をもつ。体部は口縁部より張る。底部はわずかに突出する。口縁部内外面横ナデ。体部外面平行タタキ（2本/cm）のうち一部刷毛目（8本/cm）。体部内面刷毛目（6本/cm）。底部外面ヘラ削り。底部内面ナデ。色調は茶褐色。胎土はやや粗い。焼成は良好。

土壤1 (挿図17-42)

磁器 (挿図17-42)

坏(42)

口径7.1cm、高台径2.9cm、高台高0.45cm、器高3.5cmをはかる。伊万里焼の染め付けである。

土壤2 (挿図17-40・43~49)

土師質土器 (挿図17-40)

蓋(40)

口径31.8cm、残存器高4.4cmをはかる。丸みをもつ天井部。天井と体部の境に稜を成す。口縁部は丸くおさまる。天井部外面未調整。他は横ナデ。色調は明褐色黄色。胎土は良。焼成は良好。

陶器 (挿図17-43~47)

蓋 (43~45)

鍔を持つ落とし込み蓋(43)と丸みを持つ天井部から口縁部にカーブを描いて下り内傾する面を持つ蓋 (44・45) がある。いずれも生産地は不明である。

(43) 鍔径8.3cm、残存器高2.3cmをはかる。つまみ部分は欠失している。外面下半は釉が削り取られている。

(44) 口径13.6cm、残存器高2.5cmをはかる。天井部外面に花文が描かれている。

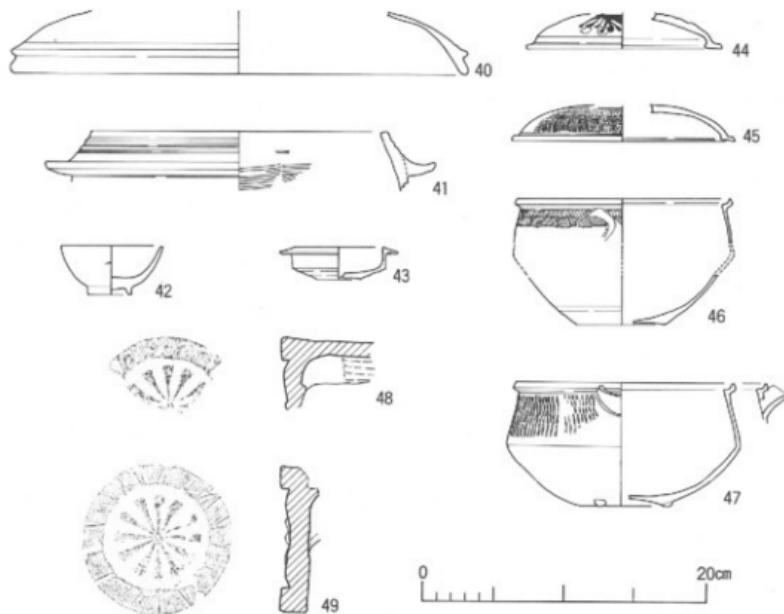
(45) 口径15.6cm、残存器高2.6cmをはかる。天井部外面に刻み目文が施されている。

行平 (46・47)

いずれも底部に煤が付着し、生産地不明である。

(46) 口径15.0cm、底径6.3cmをはかる。体部外面上部に把手の剥離痕が残る。体部上半には刻み目文が施されている。

(47) 口径15.25cm、底径5.65cm、腹径16.3cm、器高8.9cmをはかる。片口部分が残存している。体部外面上半には刻み目文が施されている。体部外面下半・外底面に煤が付着している。



挿図17 土壌1・2・ピット1出土遺物

瓦 (挿図17-48・49)

棟込瓦 (48・49)

菊丸の棟込瓦である。

48 約1/4残存する。中央に珠文を一つ配し、その周りに花弁が8弁残っている。周縁は幅1.6cmの直立線である。焼成は銀化まで至っていない。

49 中央に珠文を一つ、その周りに12弁の花弁を配している。周縁は幅1.6cmの直立線である。焼成は銀化まで至っていない。

ピット1 (挿図17-41)

瓦質土器 (挿図17-41)

羽釜(41)

口径20.8cm、鍔径27.7cm、鍔幅1.9cm、残存器高4.25cmをはかる。口縁部は内傾して段を成す。口縁端部はわずかに内傾する面をもつ。鍔はほぼ水平に貼り付けられている。体

部外面ヘラ削り。体部内面刷毛目（13本/cm）。他は横ナデ。色調は明黒灰色。胎土は良。

包含層（挿図18-50～67 図版9・10）

第1層（挿図18-50～53）

土師質土器（挿図18-50）

焰烙50

口径23.7cm、残存器高5.1cmをはかる。口縁部は直立し、端部は内傾する面をもつ。底部は丸みをもつ。体部外面刷毛目（5本/cm）。底部外面ナデ。他は横ナデ。外面には煤がべつとりと付着している。色調は黄褐色。胎土は良。

磁器（挿図18-51～53）

碗（51・52）

伊万里焼の染め付けである。

51 口径11.0cm、残存器高4.4cmをはかる。外面に㊀字と飛雲文、内面に四方櫛文が呉須で施されている。

52 高台径4.4cm、高台高0.75cm、残存器高3.4cmをはかる。外面に福と寿の文字が呉須で施されている。

皿53

口径10.3cm、高台径6.2cm、高台高0.35cm、器高2.05cmをはかる。

第2層（挿図18-54～67 図版9・10）

土師質土器（挿図18-54～56・58）

蓋54

口径23.2cm、残存器高3.5cmをはかる。平らな天井部。口縁部はハの字に開き、端部は内傾する面をもつ。口縁部内外面横ナデ。体部外面回転ヘラ削り。天井部外面未調整。天井部内面ナデ。色調は橙黄褐色。胎土は良。

小皿（55・56）

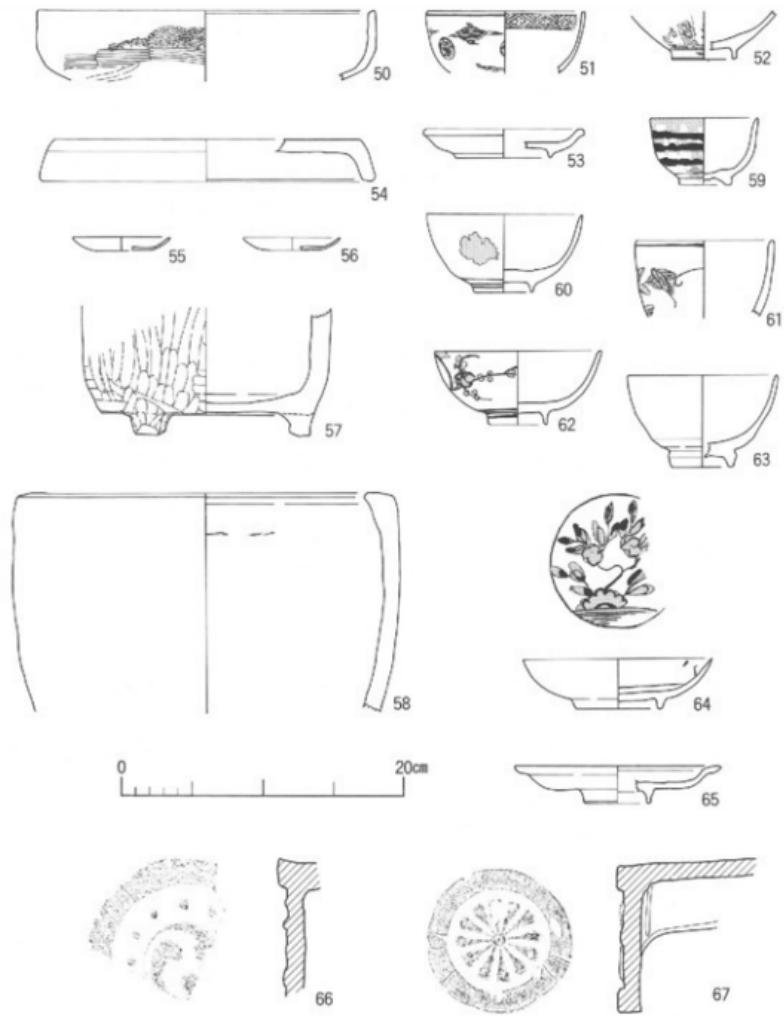
底部は糸切り調整されている。

55 口径6.9cm、残存器高0.95cmをはかる。色調は橙色。胎土は精良。

56 口径6.7cm、残存器高0.9cmをはかる。色調は橙色。胎土は精良。

火鉢58

口径24.0cm、残存器高15.55cmをはかる。口縁部は直立し、端部は肥厚し外傾する面をもつ。体部は筒状。口縁部内外面横ナデ。体部外面丁寧なナデ。体部内面粗雑な指ナデ。色調は橙褐色。胎土は精良。



挿図18 包含層出土遺物

瓦質土器（挿図18-57）

火鉢57

底径14.6cm、残存器高9.1cmをはかる。底部は平底。脚は貼り付け。体部は筒状。底部

外面ハナレ砂が付着。体部外面、一見ヘラミガキ風のナデ。他はナデ。色調は黒灰色。胎土は精良。

陶器（挿図18-59）

碗（59）

口径7.55cm、高台径3.65cm、高台高0.55cm、器高4.8cmをはかる。萩焼の碗である。高台は渦巻き状に削り出されている。外面は黒と白の釉を流しかけている。

磁器（挿図18-60~65）

碗（60~63）

伊万里焼の染め付け（60~62）と生産地不明の63がある。

60 口径10.95cm、高台径4.1cm、高台高0.7cm、器高5.55cmをはかる。外面にかなり崩れているがコンニャク印判による桐文が呉須で施されている。見込みの部分は蛇の目釉剥ぎが行われている。

61 口径9.6cm、残存器高5.4cmをはかる。外面に筆花文が呉須で施されている。

62 口径11.6cm、高台径4.0cm、高台高0.6cm、器高5.25cmをはかる。外面に梅文が呉須で施されている。見込みの部分は蛇の目釉剥ぎが行われている。

63 口径10.4cm、高台径4.3cm、高台高1.2cm、器高6.5cmをはかる。

皿（64・65）

伊万里焼の染め付け64と伊万里焼の青磁65である。

64 口径13.15cm、高台径5.9cm、高台高0.7cm、器高3.6cmをはかる。内面に呉須で草花文が施されている。

65 口径14.2cm、高台径4.5cm、高台高1.0cm、器高2.65cmをはかる。見込みの部分は蛇の目釉剥ぎが行われている。

瓦（挿図18-66・67）

軒丸瓦66と棟込み瓦67である。

軒丸瓦66

約1/4残存している巴文軒丸瓦である。内区は右巻きの三巴文である。外区には珠文が配されている。周縁は幅1.8cmの直立縁である。焼成は、銀化まで至っていない。

棟込み瓦67

菊丸の棟込み瓦である。中央に1+5の珠文を配し、その周りに12弁の花弁を配している。周縁は幅1.6cmの直立縁である。焼成は銀化まで至っていない。

(田川)

3. 調査成果

この調査も、調査区1（GC91）と同じくトレンチ調査であったため遺構の性格、時期などについてあまりはつきりとしたことは言えない。しかし、4ヶ所から出土している甕から推測すると、今回検出した2面は、いずれも18世紀以降のものであり、4つの甕の時期差については、埋甕1がもっと新しいということだけで他のものについてはあまり差異はみられない。しかし、出土状況と遺物の状態から埋甕が便所であるとすれば、1軒の家に3つもあることはふつう考えられないので、18世紀以降この場所において最低2回は建て替えが行われていると推定される。また、検出された遺構の数があまり多くはないこと、床面や礎石が後世の擾乱を受けずに残っていたことから、建て替えが頻繁ではなかったことも付け加えておく。

この調査からいえることはあまり多くはないが、建物が道路に直面する寺内町の特徴が近世から現代に引き継がれている様子がうかがえた。そして、富田林寺内町の町割りが建設当初のままであり、現在残されている町家が今後も保存されることを考慮すれば、今回の調査地のように寺内町の中心部を発掘できたことがひとつの成果といえるだろう。

（松本）

調査区3（GC91-4）

調査地：富田林町239-2

調査面積：67m²

調査地は遺跡の北東部に位置し、町割りにすると寺内町北端の一里山町と、東から2本目の亀ヶ坂筋の交差する南西角にある。この交差点のすぐ北は寺内町への出入口である一里山口であった。また、この敷地は現在、東西約11m、南北5mと長方形を成しているが、江戸時代末期には、北及び南隣の敷地と合わせた、ほぼ正方形であったことがわかっている。^{注5}また明治30~40年頃には、北隣地と一つの敷地であったことがわかっている。

調査は、店舗付き住宅建設に伴い行われた。発掘届出書は平成3年7月31日に提出され、同年10月16日に事前調査が行われた。その結果現況面から約60cm掘削したところで遺構が検出され、それをもとに協議し、敷地全面を調査することとなった。

本調査において断面観察をしたところ、遺構面として3面が確認されたが、現況より20cm下の第1面は後世の擾乱が激しく、第2、第3面を調査した。第2面は、調査区の全域にわたり、

第3面は、調査区の東側約3分の2において遺構が検出された。なお、第3面が最終地山面の赤褐色混疊土でその上約20cmが暗灰褐色土層（東側部分のみ）で、そこから第1面までは色々な土がまじっていた。以下本文では、第2面を遺構第1面、第3面を遺構第2面として扱う。

1. 遺構

第1面

現況から約60cm下で建物2、土壙2、ピット15が検出された。なお、石組の井戸1が調査区南西隅で検出されているが、現況面からのものである。

建物1

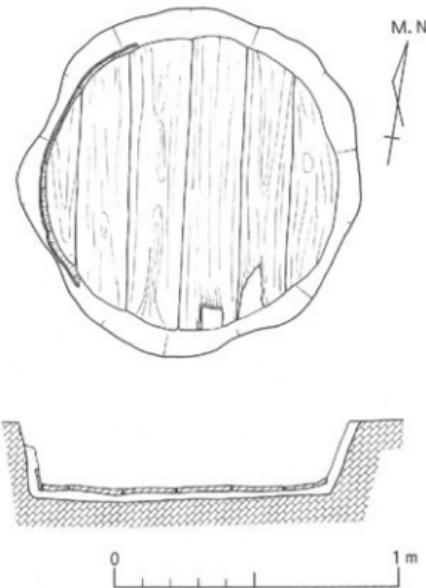
調査区の西半部で検出された東西2間、南北1間以上の近世の建物である。建物は南北両方向にのびている。柱間は、2mである。H.5からは柱礎石と思われる石が出土している。

建物2

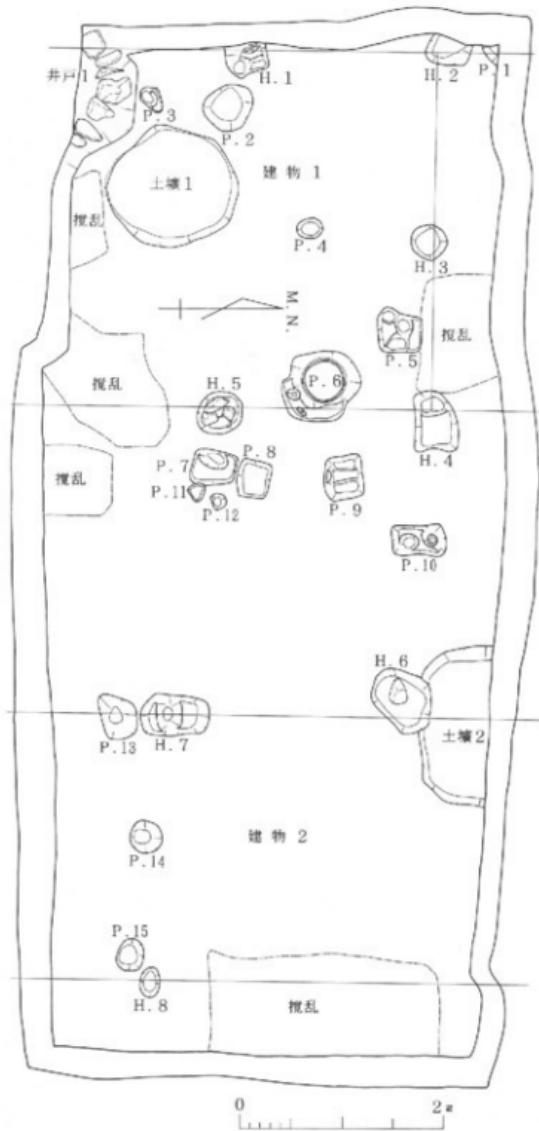
調査区の東半部で検出された。亀ヶ坂筋に面した南北方向の建物の一部と思われる。柱間は、2.5mであった。

土壙1

調査区南西部において検出した。東西1.25m、南北1.15mのやや不整形な円形である。埋土は、灰青色粘質土である。遺構の底から6枚の板材を並べて円形に施し、それぞれを竹製の楔でつなぎ、竹のたがで周囲をくくった桶の底が出土しており、桶を埋めた土壙と思われる。遺物は陶器が出土している。（図版12下）



挿図19 土壙1 平面図・断面図



挿図20 調査区3 (GC91-4) 第1面遺構平面図

ピット番号	平面形	規 模(m)	深さ(m)	土 色・土 質	遺 物
ピット1	(不 明)	(0.15) × (0.20)	0.14	灘灰黄色土	
2	椭円形	0.48 × 0.44	0.24	灰青黄色粘質土	
3	不整形	0.25 × 0.18	0.21	灰褐色土	土師器
4	橢円形	0.25 × 0.20	0.05	灘灰黄色土	土師器・陶器
5	不整形	0.45 × 0.44	0.37	灰褐色土	
6	不整形	0.80 × 0.70	0.36	灰褐色土に灰黄色砂がブロック状混入	土師器・須恵器・陶器・瓦
7	隅丸方形	0.44 × 0.35	0.21	灘灰黄色土	土師器
8	隅丸方形	0.35 × 0.33	0.11	灘灰青黄色土	土師器
9	隅丸方形	0.38 × 0.42	0.20	灘灰青黄色土	土師器・瓦
10	隅丸方形	0.29 × 0.52	0.36	灰褐色土	土師器・須恵器
11	不整形	0.18 × 0.15	0.15	灘灰青黄色土	陶器
12	不整形	0.15 × 0.15	0.13	灘灰青黄色土	
13	不整形	0.42 × 0.35	0.11	灰黄褐色砂質土	土師質土器
14	円 形	0.32 × 0.32	0.07	灰褐色土に灘灰色土が混入	
15	椭円形	0.32 × 0.25	0.06	灰褐色土に灘灰色土が混入	

表8 第1面ピット一覧表

土壤2

調査区北壁にかかるように検出されている。東西1.5m、南北0.65m分を検出した。埋土は灰褐色土で、深さは、0.08mであった。

ピット6

建物1内の東端に位置し、東西0.7m、南北0.8m、深さ0.36mを測る。ピットの底に木桶の痕がついており、この部分の直径は約40cmである。埋土は灰褐色土に灰黄色砂がブロック状に混入していた。(図版12上)

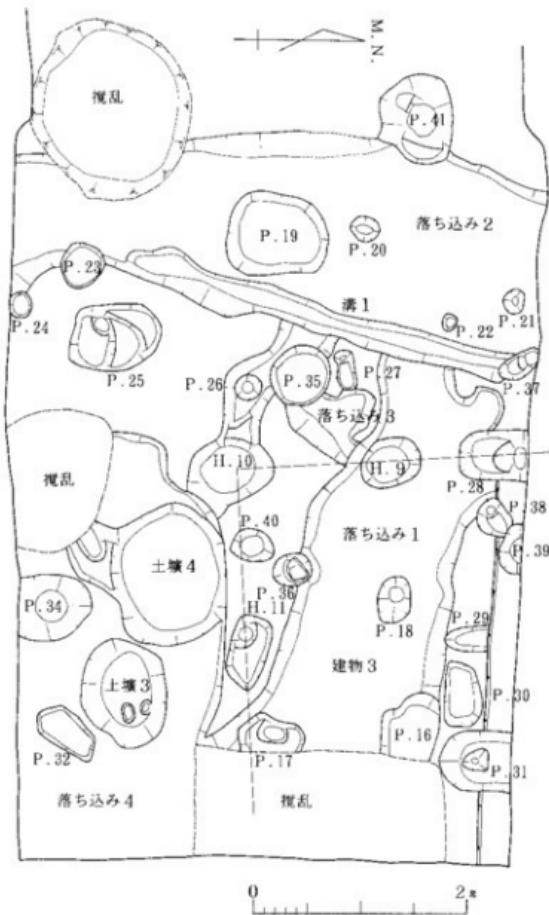
他のピットについては、表8を参照されたい。

第2面

調査区の東側3分の2において、建物1、落ち込み4、溝1、土壤2、ピット25を検出した。

建物3

調査区北東部において検出された。建物の南西角部分のそれぞれ1間分で、柱間は1.5m、深さは0.19~0.44m、埋土はH.9、H.10が褐色で、H.11は、灰褐色であった。H.10から奈良時代の須恵器の蓋杯の一部が出土しており、その他からも土師器や須恵器などが出土している。



挿図21 調査区3 (GC91-4) 第2面遺構平面図

落ち込み1

調査区内北東部の大部分を占めている。深さは0.07mで東西3.7m、南北1.45m分を検出した。埋土は褐灰色であった。

落ち込み2

第2面の東半部を大きく占めている、褐灰色の埋土をもつ遺構である。東西1.9m、南

ピット番号	平面形	規 模(m)	深さ(m)	土 色・土 質	遺 物
ピット16	(不整形)	(0.63) × 0.54	0.25	褐灰色土	土師器
17	(不整形)	0.60 × (0.35)	0.29	褐灰色土	土師器
18	不整形	0.44 × 0.32	0.15	灰褐色土	
19	不整形	0.95 × 0.80	0.34	灰褐色土に褐灰色土がブロック状に混入	土師器・須恵器
20	不整形	0.28 × 0.26	0.06	灰褐色土	
21	不整形	0.23 × 0.19	0.16	濁灰褐色土	土師器
22	不整形	0.14 × 0.17	0.10	濁灰褐色土	
23	楕円形	0.49 × 0.42	0.08	褐灰色土に炭が混入	土師器
24	(不整形)	0.25 × (0.2)	0.12	暗灰褐色土	土師器・須恵器
25	不整形	0.80 × 0.58	0.29	褐灰色土	土師器・須恵器
26	円 形	0.23 × 0.24	0.19	褐灰色土	土師器
27	不整形	0.37 × 0.18	0.17	灰褐色土に褐灰色土が混入	土師器
28	(不整形)	(0.67) × 0.48	0.25	褐灰色土	
29	(不整形)	(0.40) × 0.25	0.06	褐灰色土	
30	不整形	0.63 × 0.40	0.07	濁灰褐色土	
31	(不整形)	(0.65) × 0.56	0.35	褐灰色土	
32	不整形	0.65 × 0.34	0.05	灰褐色土に褐灰色土が混入	
34	(不整形)	(0.68) × 0.61	0.32	灰褐色土に褐灰色土が混入	土師器
35	円 形	0.53 × 0.37	0.10	灰褐色土	土師器
36	円 形	0.34 × 0.30	0.05	褐灰色土	土師器
37	不整形	(0.4) × 0.20	0.17	褐灰色土	
38	不整形	0.35 × 0.32	0.22	濁灰褐色土	須恵器
39	(不整形)	0.47 × (0.23)	0.19	灰褐色土	
40	楕円形	0.39 × 0.29	0.18	灰褐色土	
41	不整形	0.68 × 0.84	0.30	灰褐色土	

表9 第2面ピット一覧表

北5m分を検出した。深さは、0.12mである。底からピット、溝が検出されている。

落ち込み3

落ち込み1、2、4をつなぐように検出された。底からピットが検出されたり、上からピットに切り込まれているため、規模ははっきりしない。埋土は褐灰色土、深さは、0.2mを測る。

落ち込み4

調査区の南東部分を占める、濁灰黄色粘質土の埋土をもつ遺構である。南北1.9m、東西4m分を検出した。深さは、0.15mを測る。底からピット、土壤が検出されている。

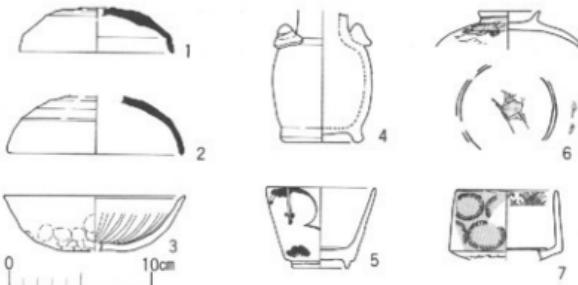
溝1

落ち込み2の底から検出された南北方向の溝で、長さ3.5m、幅0.35m分を検出した。深さは、0.06mを測る。調査区北端でピットに切り込まれている。

土壤3

東西1.05m、南北0.8mで南東部分がややくほんだ不規則な楕円形を成している。土壤

本体は、深さ0.27mで、底部に0.1mのへこみが2ヶ所ある。サヌカイト剥片が1点出土している。埋土は、灰褐色土に褐色土が混入していた。



挿図22 遺構出土遺物

土壤4

土壤3と同じく落ち込み4の底で検出されている。東西1.3m、南北1.1mの不規則な梢円形に、南西方向へのびる突出部がついている。深さは、0.3m、埋土は、褐色土であった。遺物は、奈良時代の土師器が出土している。

ピットについては、表9を参照されたい。

(松本)

2. 遺物

今回の調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器や円筒埴輪・瓦・サヌカイト・釘・桶等がある。これらの多くは細片で出土量も少ない。これらの大半は、包含層から出土したもので、遺構から出土したものは表10に示したとおりである。

以下、図示した遺物について遺構毎に観察を行う。

土壤 (挿図22-4~7 図版13)

土壤1 (挿図22-4~7)

磁器 (挿図22-4~7)

青磁双耳瓶(4)

高台径5.15cm、高台高0.7cm、双基部径3.9cm、残存器高9.4cmをはかる。伊万里焼の青磁双耳瓶である。頸部の耳は、貼り付け。内面・疊付は、露胎。

そば猪口(5)

口径7.65cm、高台径4.4cm、高台高0.6cm、器高5.75cmをはかる。伊万里焼のそば猪口で

遺構	弥生土器	土師器	須恵器	瓦器	土師質器	須恵質器	瓦上質器	瓦	陶器	磁器	その他
建物 1											
H. 2		○									
H. 4	○	○									釘
H. 5	○	○									礫石
H. 6	○	○									石
H. 7	○	○									
建物 2											
H. 9		○									
H. 10		○	○								
土壤 1								○	○	○	桶
土壤 2		○									
土壤 3	○	○									サヌカイト
土壤 4	○	○									
落ち込み 1	○	○			○						
落ち込み 2	○	○									
落ち込み 3	○	○									
落ち込み 4	○	○									
ピット 3	○										
ピット 4	○										
ピット 6	○	○						○	○		円筒埴輪
ピット 7	○										
ピット 8	○										
ピット 9	○							○			
ピット 10	○	○									
ピット 11									○		
ピット 13				○							
ピット 16	○										
ピット 17	○										
ピット 19	○	○									
ピット 21	○										
ピット 23	○										
ピット 24	○	○									
ピット 25	○	○									
ピット 26	○										
ピット 27	○										
ピット 32	○										
ピット 34	○										
ピット 35	○										
ピット 36	○	○									礫石
ピット 38		○									

表10 各遺構出土遺物一覧表

ある。外面に梅文が描かれているが、釉の発色が悪い。

蓋(6)

つまみ径4.2cm、つまみ高0.8cm、残存器高2.7cmをはかる。伊万里焼の蓋である。口縁部は、欠失している。内外面に呉須で施文されている。

筒形茶碗(7)

口径7.0cm、残存器高5.1cmをはかる。伊万里焼の筒形茶碗である。高台部を欠失している。外面には雪輪文、内面には四方捧文帯が呉須で描かれている。

落ち込み (挿図22-1・3 図版13)

落ち込み2 (挿図22-1)

須恵器 (挿図22-1)

杯蓋(1)

口径10.7cm、残存器高3.15cmをはかる。やや偏平な天井部から、下外方へ開く口縁部。口縁端部は、丸くおさまる。天井部外面ヘラ切り未調整。天井部内面不定方向のナデ。体部外面向回転ヘラ削り。他は、回転ナデ。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は、右回り。色調は、灰青色。胎土は、やや密。焼成は、良好・堅緻。

落ち込み4 (挿図22-3)

土師器 (挿図22-3)

杯(3)

口径12.7cm、残存器高4.0cmをはかる。底部は、ほぼ平底。内彎して立ち上がる口縁部。口縁端部は、やや内傾する面をもつ。口縁部内外面横ナデ。体部・底部内面横ナデの後放射状暗文。他は、ナデ下に指頭圧痕が残る。色調は、乳橙色。胎土は、やや良。焼成は、やや悪い。

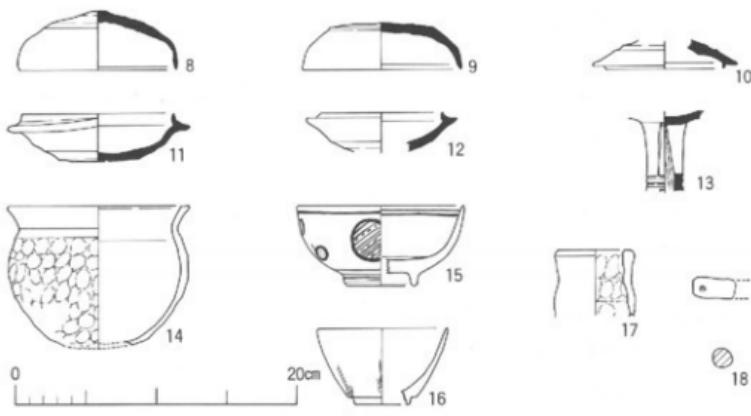
ピット (挿図22-2)

ピット25 (挿図22-2)

須恵器 (挿図22-2)

杯蓋(2)

口径12.2cm、残存器高4.1cmをはかる。丸みを持つ天井部から下外方に開く口縁部。口縁端部は、丸くおさまる。天井部外面回転ヘラ削り。天井部内面不定方向のナデ。他は、回転ナデ。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は、左回り。色調は、青灰色。胎土は、密。焼成は、良好・堅緻。



挿図23 包含層出土遺物

包含層 (挿図23-8~18・挿図24-19・20 図版13)

第4層 (挿図23-8~18・挿図24-19・20 図版13)

土師器 (挿図23-14)

甕14

口径12.7cm、残存器高10.0cmをはかる。「く」の字に外反し口縁部。口縁端部は、わず凹む面をもつ。体部は、球形を成す。口縁部内外面横ナア。体部内面ナデ。体部外面指頭圧痕が顕著に残る。色調は、乳黄橙色。胎土は、やや良。焼成は、やや悪い。

須恵器 (挿図23-8~13)

杯蓋 (8~10)

(8) 口径11.1cm、残存器高4.2cmをはかる。尖り気味の天井部から下外方に開き、口縁部でやや垂直に下り、端部は内傾する面をもつ。天井部外面ヘラ切り未調整。天井部内面回転ナデの後一定方向のナデ。他は、回転ナデ。色調は、青灰色。胎土は、やや密。焼成は、良好・堅緻。

(9) 口径11.15cm、器高3.3cmをはかる。偏平な天井部から下外方に開く口縁部。口縁端部は、内傾する面をもつ。天井部外面ヘラ切り未調整。天井部内面回転ナデの後一定方向のナデ。色調は、灰青色。胎土は、密。焼成は、良好・堅緻。

(10) 口径10.1cm、かえり径8.1cm、かえり高0.3cm、残存器高2.0cmをはかる。わずかに丸みをもつ天井部から、ゆるやかに下り口縁部に至る。口縁部内面にかえりをもつ。かえりは、口縁部より突出する。天井部外面回転ヘラ削り。他は、回転ナデ。回転ヘラ削り時のロクロの回転方向は、左回り。色調は、青灰色。胎土は、密。焼成は、良好・堅緻。

杯身(11・12)

11) 口径10.75cm、受け部径12.9cm、たちあがり高0.8cm、器高3.39cmをはかる。たちあがりは、短く内傾し、口縁端部は、つまみ上げるようにやや尖り気味におさまる。受け部は、ほぼ水平にのびる。底部は、ほぼ平底。全体に焼き亞み

が著しい。底部外面ヘラ切り未調整。底部内面一定方向のナデ。他は、回転ナデ。色調は、青灰色。胎土は、やや密。焼成は、良好・堅緻。

12) 口径8.5cm、受け部径10.5cm、たちあがり高0.45cm、残存器高2.8cmをはかる。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさまる。底部は、丸みをもつ。底部外面回転ヘラ削り。他は、回転ナデ。色調は、灰青色。胎土は、やや密。焼成は、良好・堅緻。

高杯(13)

脚基部径3.3cm、残存器高5.7cmをはかる。柱部のみ残存。長方形のスカシが上下2段に穿たれている。スカシは1回で開けられ、面取りはしていない。杯部内面不定方向のナデ。柱部外面回転ナデ。柱部内面紋目。色調は、青灰色。胎土は、やや密。焼成は、良好・堅緻。

陶器(挿図23-16)

碗(16)

口径8.95cm、高台径3.8cm、高台高0.35cm、残存器高5.4cmをはかる。瀬戸焼の碗である。外面に鉄で草文が描かれている。

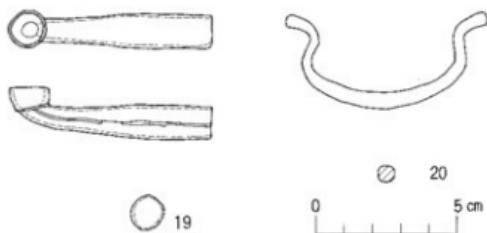
磁器(挿図23-15)

碗(15)

口径11.7cm、高台径4.6cm、高台高0.9cm、器高5.7cmをはかる。伊万里焼の碗である。外面に大小の丸文が描かれている。

製塙土器(挿図23-17)

口径5.1cm、残存器高4.75cmをはかる。体部は筒形をし、口縁部はわずかに外反し、口縁端部は、上部に面を持つ。色調は、黄褐色。胎土は、粗い。焼成は、良。紀淡海狭産のものである。



挿図24 包含層出土遺物

土製品（挿図23—18）

土錘⑯

残存長2.9cm、幅1.35cmをはかる。棒状の錘。おそらく両端に孔が穿たれている。色調は、茶褐色。胎土は、やや良。焼成は、良。生胸成麗緻。

金属製品（挿図24—19・20）

煙管⑯

火皿径1.3cm、火皿高0.85cm、雁首径1.2cm、雁首長6.9cmをはかる。煙管の雁首部分のみ残存。火皿は逆台形を呈す。脇返しはほとんど湾曲しない。

把手⑯

最大長7.1cm、幅0.6cmをはかる。

(田川)

3. 調査成果

これまでの寺内町遺跡の調査は、ほとんどが個人住宅の調査であったため、小規模で、掘削もあまり深いところまでは行われていない。今回の調査も小規模ではあったが、深いところでの調査をおこなうことができた。これにより、次のことが判明している。

まず、第1遺構面から第2遺構面に至る掘削で、寺内町成立以前の遺物を含む層が確認されており、このことから、従来、寺内町は台地状になっている自然地形を利用してつくられたとされているが、場所によっては盛土等の土木工事が行われていたということがわかった。また、遺構面より上で確認された擾乱等により、町割りは建設当初のままであるが、建物は時代により移り変わっているということも読み取れた。さらに、文献等において寺内町成立以前、調査地周辺は「富田の荒芝地」と記述されており、集落が存在したとはされていなかったが、第2面の遺構から出土した遺物のほとんどが奈良時代頃のものであることから、奈良時代には、このあたりに集落が存在していたと考えられること、の以上3点である。

これらの結果により、今後の調査においては、寺内町の当初の建設がどのように行われたかを解明し、調査の対象を奈良時代にまで拡大することが必要であろう。

(松本)

III まとめ

以上、平成3年度国庫補助調査概要報告として、寺内町遺跡の調査について述べてきた。この遺跡は、富田林市の歴史を語る上でも欠かすことの出来ない遺跡であると共に、現存する町家がそのまま文化遺産となっている。当市でもその重要性を認識し、昭和62年に町並み保存要綱を制定し、修景事業を実施している（平成3年に富田林市伝統的建造物群保存地区保存条例を設置）。一方、埋蔵文化財の調査は、旧杉山家の解体修理に伴う調査を契機とし昭和60年から始められた。当初は調査件数も少なかったが、近年、市の公共事業に伴う調査や個人住宅の建て替えに伴う調査が増加している。

近世遺跡としての寺内町の概要は、これまでの調査で検出された遺構、井戸・甕・暗渠・排水路・礎石などや出土している遺物の陶器、磁器の茶碗・皿、すり鉢など日常使用されたものからおぼろげながら、つかむことができるようになってきた。また、今年度の調査成果から奈良時代の遺跡としてとらえる必要性もでてきた。今後はこれまで積み重ねた調査区ごとの成果を総括していくことが必要となるであろう。また、実施されている町並み保存のため埋蔵文化財の調査件数が限られてくるであろうが、その中から少しでも多くのことを引き出せるようにしていくことが、これからの課題である。

（松本）

注1 木沢弘二 「富田林寺内町の古図による屋号の復元」 桐河泉文化資料38号 1984年11月20日

注2 石製品の石材については、大阪府立富美丘高等学校教諭室賀肇氏に鑑定していただいた。

注3 堺市教育委員会 「堺環濠都市遺跡（SKT79）発掘調査報告」 塞市文化財調査報告

第三十七集 1988年12月

「近世都市遺跡出土の陶磁」 東洋陶磁学会第17大会資料 1989年11月

注4 注1に同じ

注5 注1に同じ

注6 山内紀嗣 「布留遺跡出土の製塙土器」 考古学調査研究中間報告9 埋蔵文化財

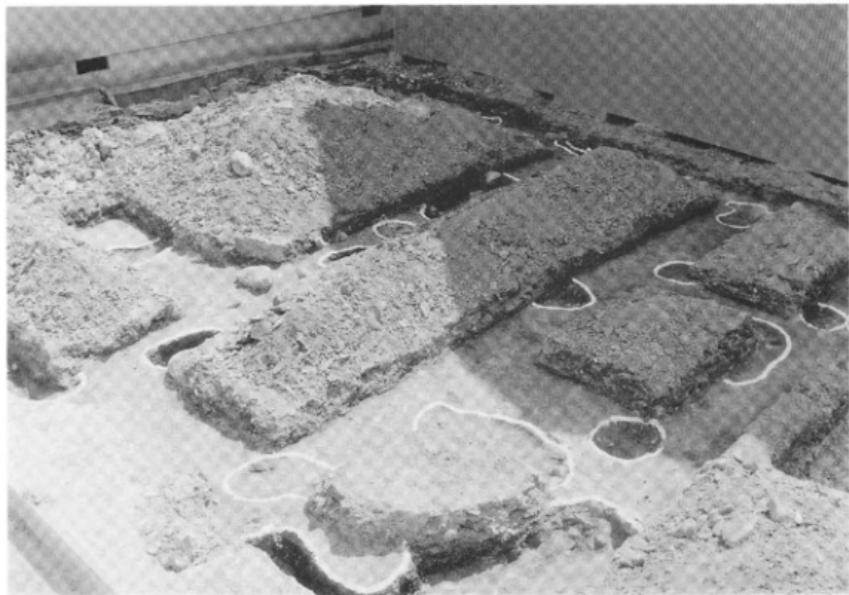
天理教調査團 1984年

注7 富田林市 「富田林『寺内町』歴史的町並み報告書」 1984年



付図 摂河泉文化資料38号 「富田林寺内町の古図による復元」より転載

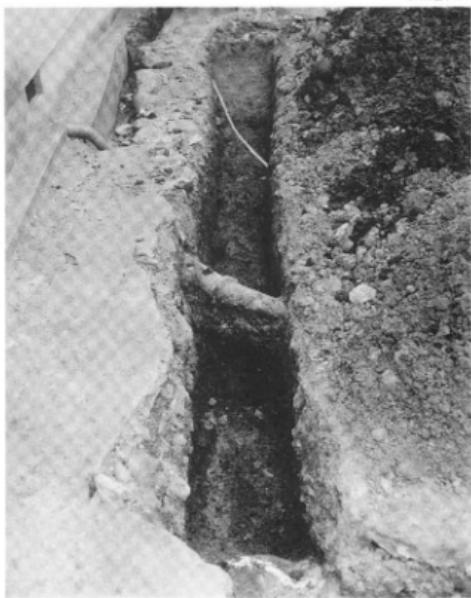
図 版



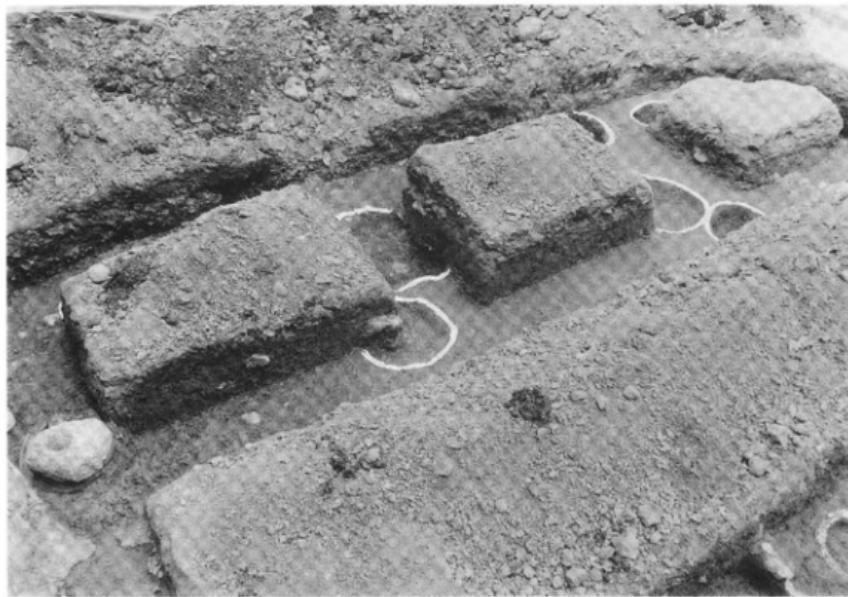
GC91 第1面 遺構全景（北東から）



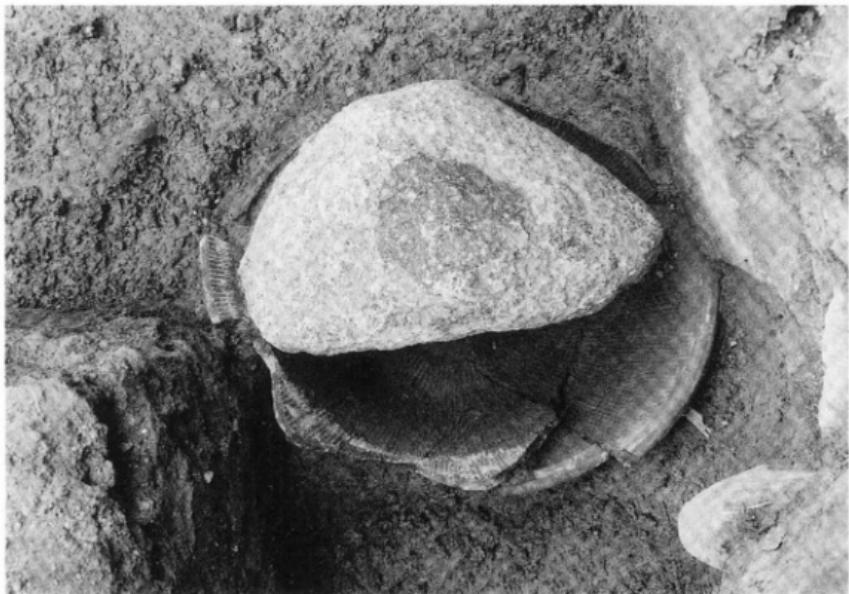
GC91 第1面 北東部（東から）



GC91 第2面 南端部全景（東から）



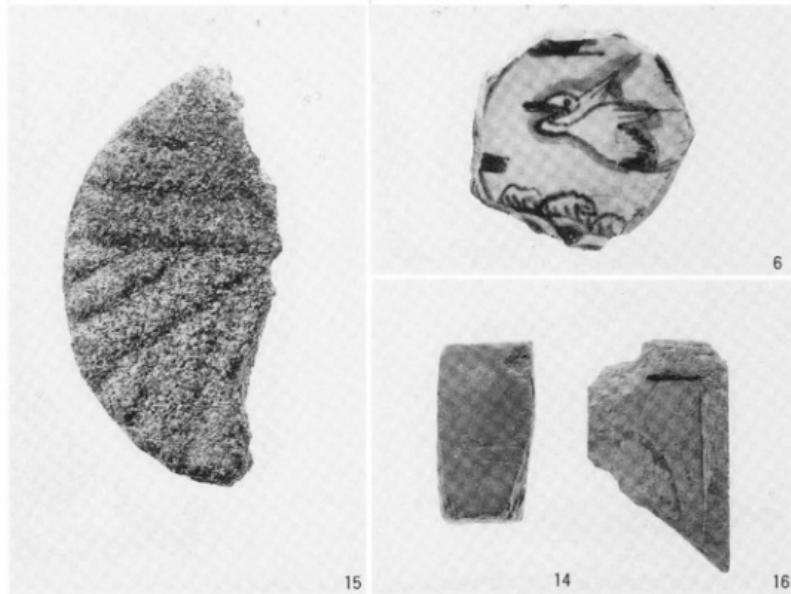
GC91 第2面 北西部全景（南から）



GC91 第2面 ピット50 遺物出土状況（北から）



GC91 第2面 北端部全景（東から）



GC91 出土遺物



13

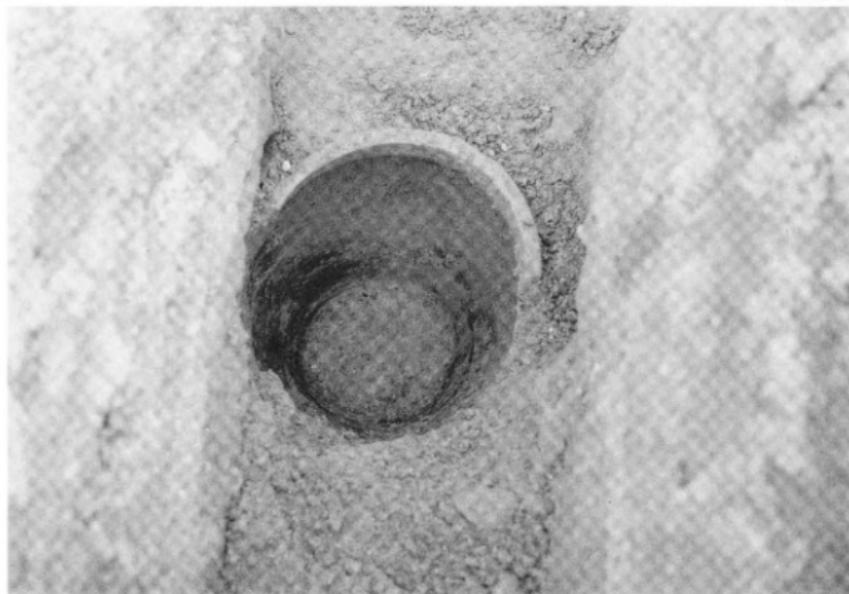
GC91 出土遺物



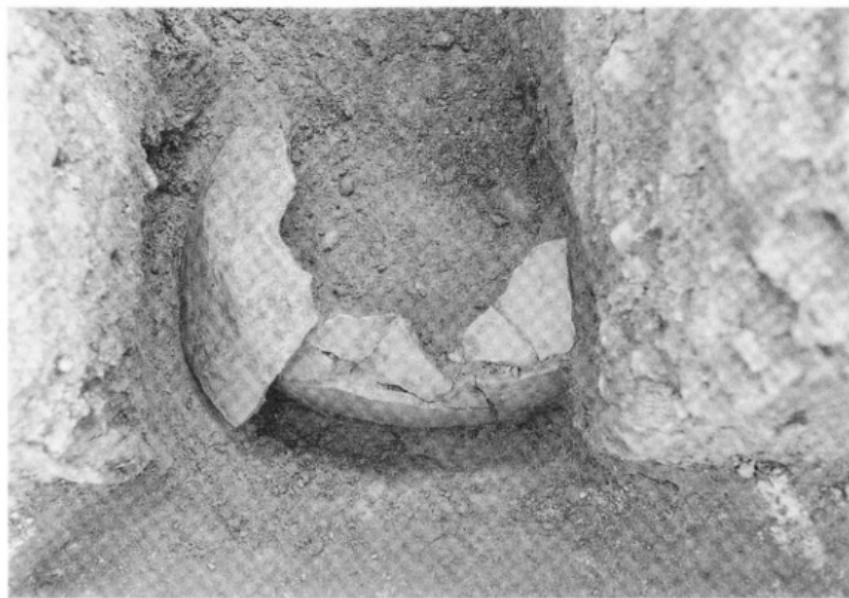
GC91-2 調査区南西部（南から）



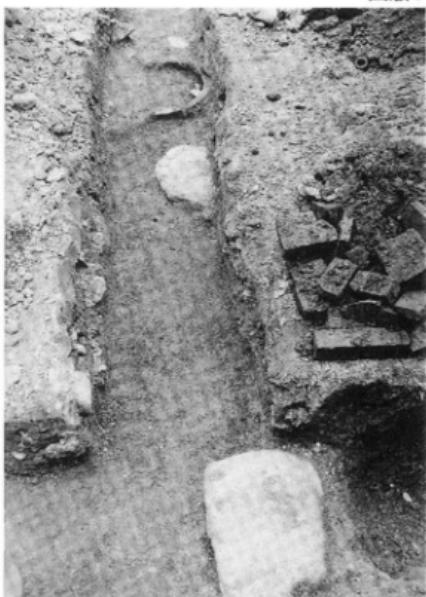
GC91-2 調査区南端部（東から）



GC91-2 埋甕 1 (北から)



GC91-2 埋甕 3 (東から)



GC91-2 第1面 北西部（西から）



GC91-2 第2面 北西部（東から）

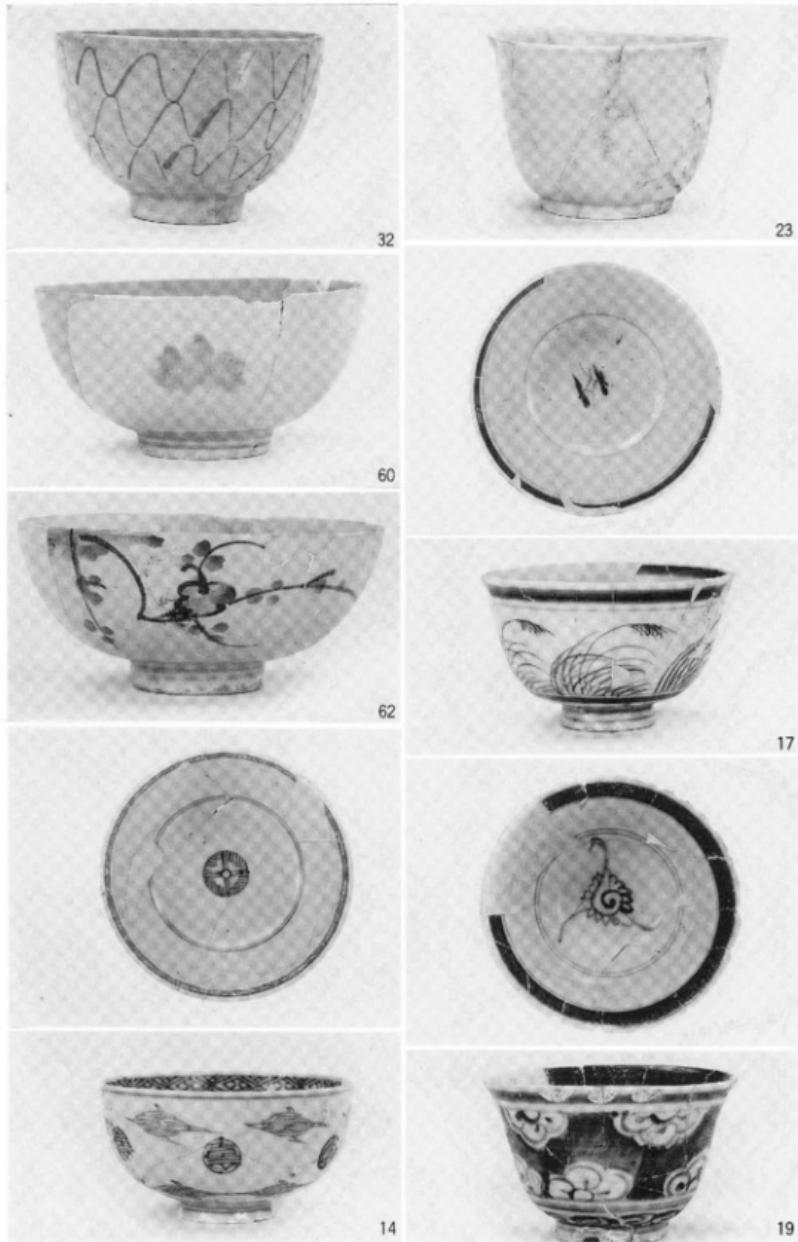


GC91-2 第1面 中央部（東から）



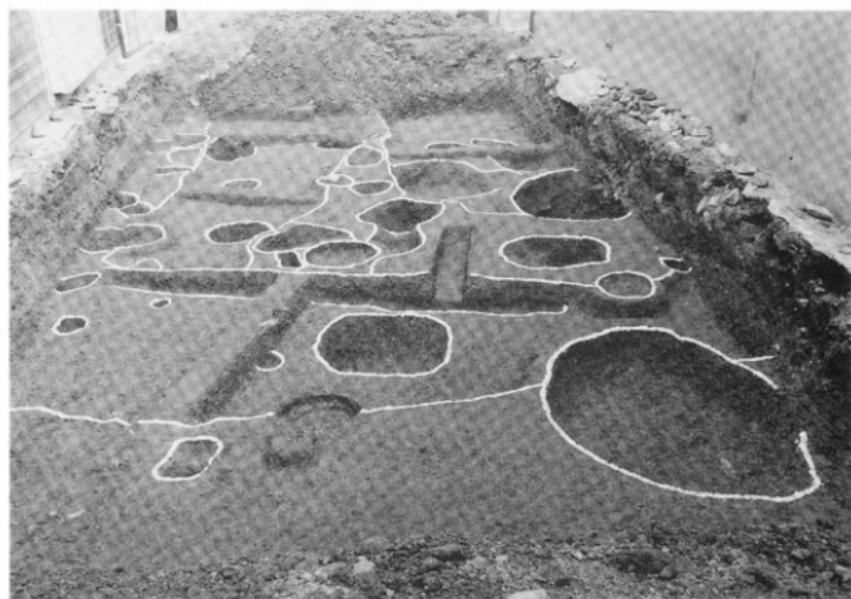
GC91-2 窓1（東から）



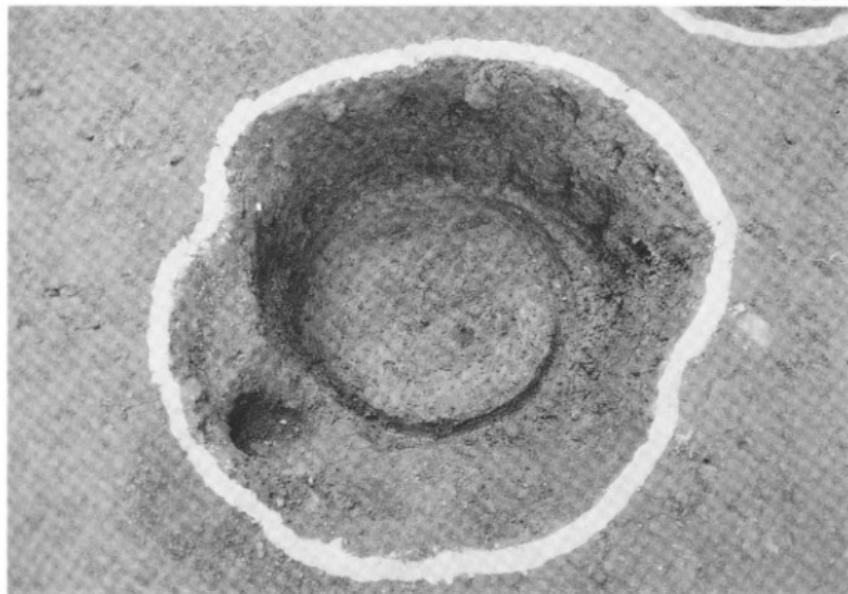




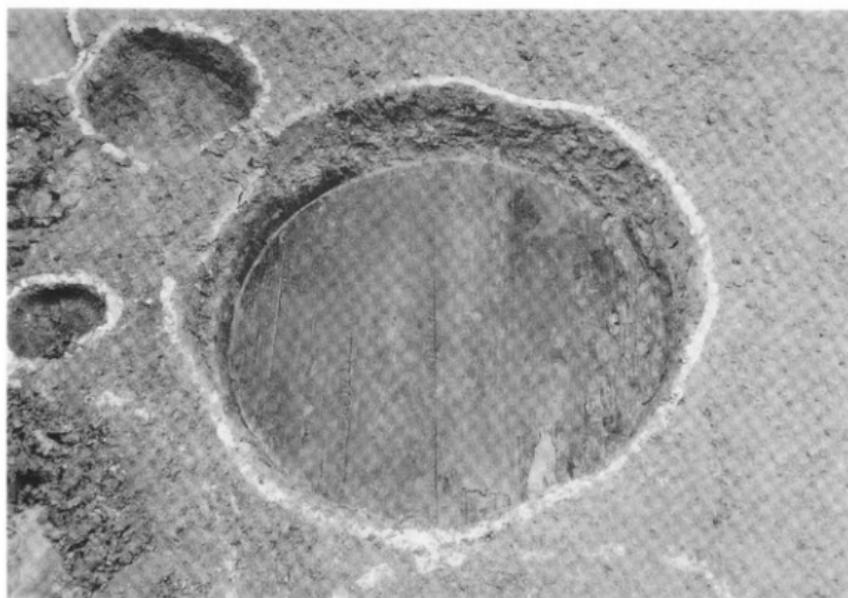
GC91-4 第1面 調査区全景（東から）



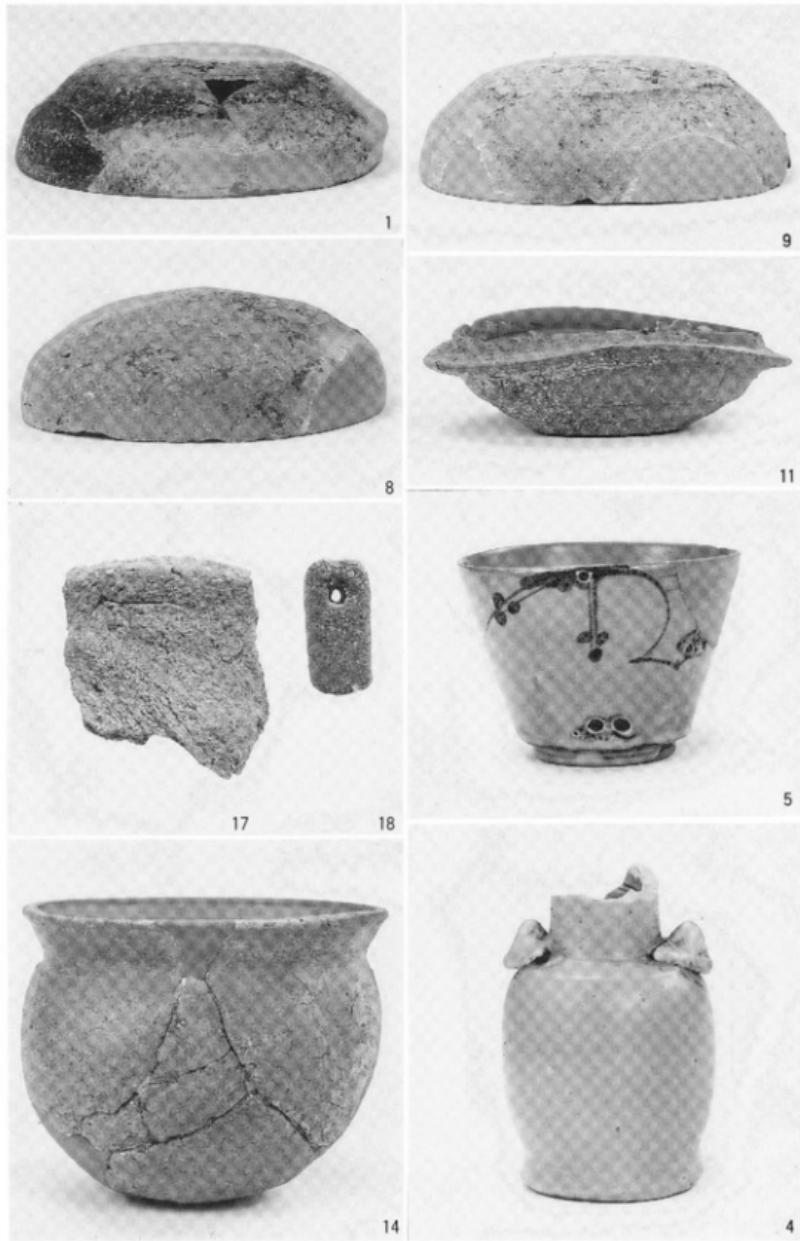
GC91-4 第2面 調査区全景（西から）



GC91-4 第1面 ピット6（東から）



GC91-4 第1面 土壌1（南から）



富田林市埋蔵文化財調査報告21

発行年月日 1992年3月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 橋本印刷株式会社

1992.300

